北丹波・東流遺跡（きたたんば ひがしながれ）

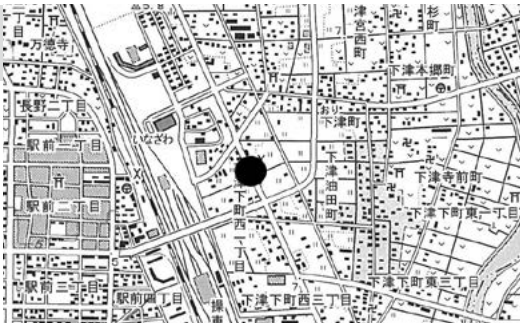
所　在　地　稲沢市下津丹下田町・下津森町・下津下町西一丁目
（北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒）

調 査 理 由　街路改良工事（都）名古屋岐阜線

調 査 期 間　平成25年11月～平成26年2月

調 査 面 積　1,000㎡

担　当　者　永井宏幸



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　県道名古屋岐阜線の街路改良工事事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、昨年度に2,320㎡、今年度に1,000㎡おこなった。調査区は現道に沿って、街路改良部分を対象とした。南北に延びる県道に対して、東西方向を横断する公道などを境に、便宜上13Ａ～13E区の都合５つの調査区に分けて調査を進めた。なお、今年度は県道の西側をおもに調査した。

立地と環境　遺跡は、遺跡の北東側にある青木川右岸に広がる自然堤防およびその後背湿地に立地する。標高は現況４～５ｍ前後である。遺跡範囲と明治17年地籍図から当時の土地利用を照合してみると、この中央付近に北東から南西にかけて水田がある。そのほかは概ね畑地利用であった。つまり、遺跡は微高地上に展開し、その中央に低い部分が横断する景観が地籍図から読み取れる。調査の結果、低い部分に古代の自然河道が確認され、この部分は周辺に比べ地下水位が高く、調査中湧水に悩まされた。

調査の概要　調査の結果、昨年度に引き続き古墳時代前期、奈良時代初頭を中心とした古代前半期、鎌倉時代初頭を中心とした中世前半期、以上大きく3つの時期を中心に遺構が展開することが再確認された。

古墳時代の遺構は遺跡の北寄りで溝を確認した。農水路と推定した昨年度の調査で検出した溝の規模は、幅1.0m、深さ0.6mのものが最も多かった。この規模を基準にすると、13A区001SDと13C区045SDは標準サイズの溝、13B区003SDはこれらに比べ1/2程度の溝を確認した。農水路とすれば、幹路と枝路になるかもしれない。遺物は13C区に古墳時代の甕などが少量出土した程度で、昨年度にくらべ少ない。時期は層序に準拠して古墳時代前期と考えた。なお、13B区溝003SD周辺の水田耕作土層以外に耕作地に関連する痕跡は認められなかった。

古代の遺構はほぼ全域に展開していた。13C・13D・13Ec区では竪穴建物を確認した。13C区竪穴建物043SIは、南北軸4.8m、深さ55cmを測り、壁際に壁溝がめぐる。北辺に焼土と炭化物が集中する箇所があり、カマドの可能性がある。13Ec区020SXは造り付けカマドをもつ竪穴建物で、遺物量も多く、カマドに小型の伊勢甕が倒立状態で出土した。いずれも８世紀初頭前後を中心とする時期である。

12世紀後半から13世紀前半を中心とした中世の遺構は、13C・13D・13Ebで確認した。そのなかでも13C区は、掘立柱建物が想定できるピット列などを検出した。この調査区は、他の調査区にくらべ後世の削平が少なかった。古代の遺構より30cmほど高い位置で中世の遺構を確認できた。昨年度、12F区などで確認した幅３m、深さ約1mの溝を13D区と13Eb区でも確認した。13D区溝002SDは敷地を区画する溝の南西隅に相当し、調査区内

で直角に屈曲する。13Eb区溝008SDは尾張型６型式碗皿類を中心に青磁の瓶類底部などがまとまって出土した。

ま と め　本年度の成果として特筆すべき点は、中世前半期の遺構群である。昨年度、井戸群を確認した12C区、大溝を確認した12F区は遺跡の北側で、一般的な屋敷地より規模の大きい区画を想定した。本年度は遺跡南側の溝の存在によって少なくとも２区画以上新たに確認したことになる。

これら区画の位置付けは今後の課題であるが、これまでに中世前半期を中心とする遺跡が周辺に存在しなかったことと、この時期に前後する下津北山遺跡と下津宿遺跡が中世国府・国衙に関連する遺跡として指摘されていることからも、中世前半期の注目すべき遺跡となった。（永井宏幸）

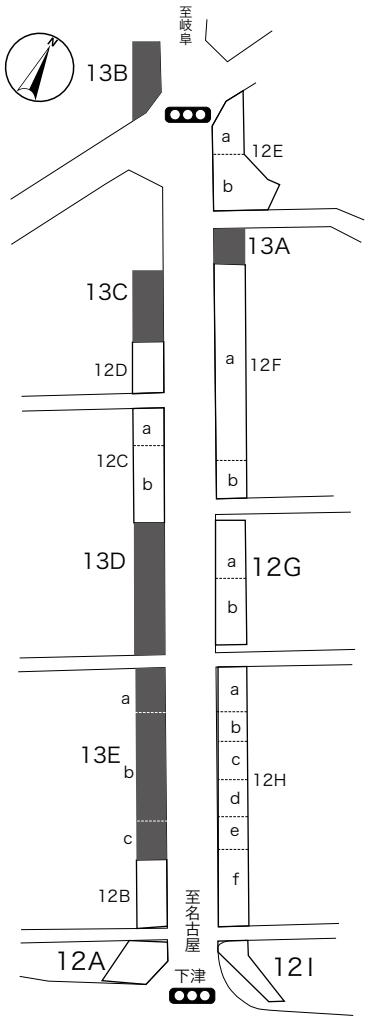
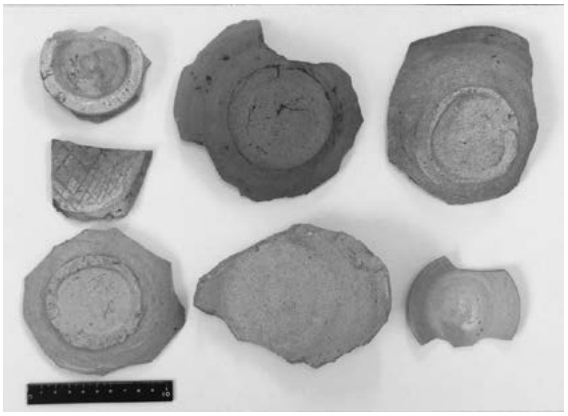


図1 調査区位置図（1:2,000）



13Eb区008SD出土遺物



13D区002SD



13Eb区008SD

五反田（ごたんだ）遺跡

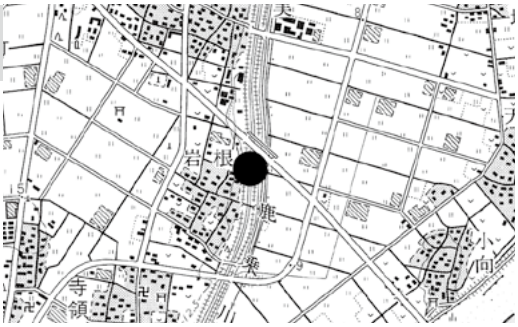
所　在　地　安城市小川町五反田・岩根下
（北緯34度54分13秒 東経137度5分43秒）

調 査 理 由　床上浸水対策特別緊急事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成 25 年 5 月～平成 25 年 6 月

調 査 面 積　450㎡

担　当　者　酒井俊彦



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は一般河川鹿乗川改修工事に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成22年度に調査を行い、今回を含めた総調査総面積は2170㎡である。今年度は、平成22年度調査区西側に位置する鹿乗川と導水路の間の調査を行った。

立地と環境　本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成12年より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の5遺跡が連続して所在する。鹿乗川は碧海台地東辺を直線的に南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。旧鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、本遺跡及び惣作遺跡、寄島遺跡等で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧河川の自然堤防上に展開する。標高は5～6mである。平成22年度の調査では上面で近世および中世の遺構が検出され、下面では弥生時代後期から古墳時代初めの時期の方形周溝墓などの遺構が検出されている。

調査の概要　今回の調査では、上下2面の調査を行った。調査区は鹿乗川と導水路の間の現堤防下に当たり、鹿乗川に近接している。上面は堤防の盛り土下の近代の水田耕作土層下面で検出を行い、明確な遺構は確認されなかった。下面は中世の耕作土層下にある遺物包含層である黒色土層で行い、明確な遺構は確認されなかった。包含層下は灰色シルトの基盤面となる。調査区の南部の大部分は現鹿乗川に沿う旧河道の縁辺に位置し、基盤面は南に緩やかに下降する。調査区北端で標高約6m、南端で同5.5mである。北端を除いて、包含層上に河道を埋積する湿地性の堆積層があり、南ほど厚くなる。湿地性の堆積物からは平安時代から中世の灰釉陶器、山茶碗などの遺物が少量出土する。黒色土層からは古墳時代から奈良時代の遺物が出土した。主な遺物としては、奈良時代の須恵器、古墳時代前半の土師器が検出された。

ま　と　め　今年度の調査は、大部分が旧河道の遺物包含層の調査となり、遺構は確認されなかった。調査区の北部では、平成22年度の調査区とほぼ同じ標高で安定した水平な遺物包含層が検出され、古墳時代旧河道の位置が類推できる情報が得られたことにより、今後は遺跡の展開について検討することができるものと考える。

（酒井俊彦）



調査区全景（南より）



調査区全景（北より）



近世杭列（南より）



旧河道全景（北より）

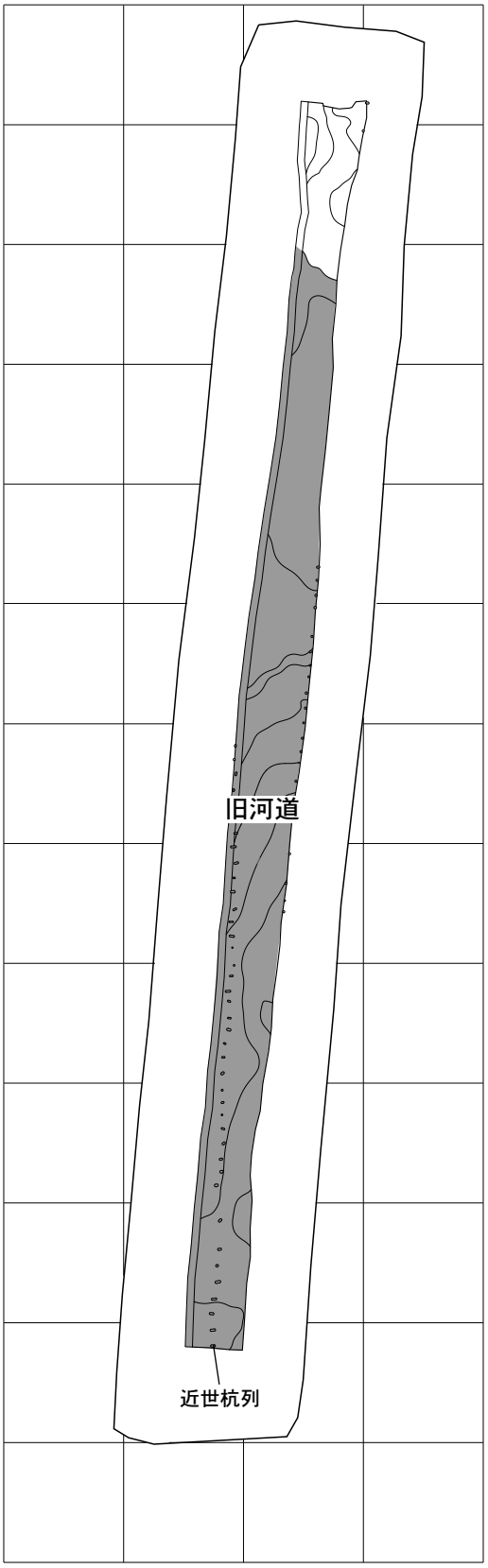


図１　遺構全体図（1:300）

下懸（しもかけ）遺跡

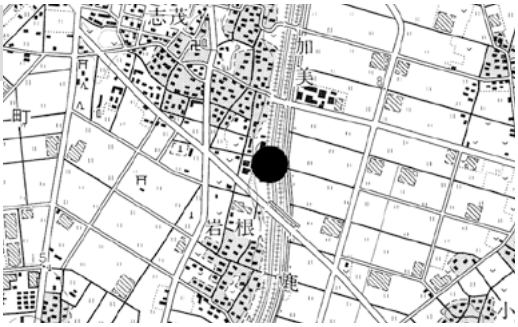
所　在　地　安城市小川町向田
(北緯34度54分20秒 東経137度5分43秒)

調 査 理 由　床上浸水対策特別緊急事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成25年7月～平成25年10月

調 査 面 積　1600 ㎡

担　当　者　酒井俊彦



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は床上浸水対策得悦緊急事業（鹿乗川）に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成 12 年度と平成 21 年度に鹿乗川導水路の東側の調査を行っている。今回を含めた総調査総面積は 5010 ㎡である。今年度は、鹿乗川と鹿乗川導水路間の調査を行った。

立地と環境　本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成 12 年より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の 5 遺跡が連続して所在する。鹿乗川は碧海台地東辺を直線的に南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。旧鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、本遺跡及び姫下、惣作、寄島で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧河川の自然堤防上に展開し、標高は 5 ～ 6m である。平成 12･21 年度の調査では弥生時代、古墳時代前期、古代の遺構･遺物が検出されている。また、北西から南東方向に流下する古墳時代以前の旧河道が確認され、古墳時代前半の土器と多量の木製品が出土している。

調査の概要　調査区は鹿乗川と導水路間の現堤防下に当たり、鹿乗川に近接している。今年度は幅約 7m、長さ約 230m の調査区を南半を 13A 区、北半を 13B 区として調査した。今回の調査では、上下 2 面の調査を行った。上面は中世～近世の耕作土層下、奈良時代の遺物包含層である黒色土層上面で行い、13A 区で中世の大形の土坑 2 基を検出した。また、鹿乗川の近世の河道の落ち込みを 13A 区北半で検出し、近世の陶磁器類と木製品が少量出土した。同層面で、古墳時代前期以前の旧河道が 13B 区の北部で確認された。下面は奈良時代および古墳時代後半の遺物包含層下の基盤面で遺構を検出した。主な遺構として、古墳時代前期の竪穴建物と考えられる浅い落ち込み 3 基、平行して走る幅 30 ～ 40cm の溝群が検出された。竪穴建物からは少量の土師器が検出されたが、溝からは遺物は出土しなかった。切り合い関係から溝群は集落に先行する時期になる。また、13B 区の旧河道埋土下層より、古墳時代前期の土師器、木製品、自然木が出土した。

ま　と　め　今年度の調査区は、遺跡の北西部に相当する。調査の結果、これまでの調査で検出されていた古墳時代前半以前の旧河道の延長部分が確認され、同様の遺物が出土した。また、同時期の集落が展開し、先行する時期の溝群との関係が確認された。今後は今回の調査区より北の部分の調査を通じて、遺跡の広がりと寄島遺跡との関連性を検討することが課題となる。

（酒井俊彦）

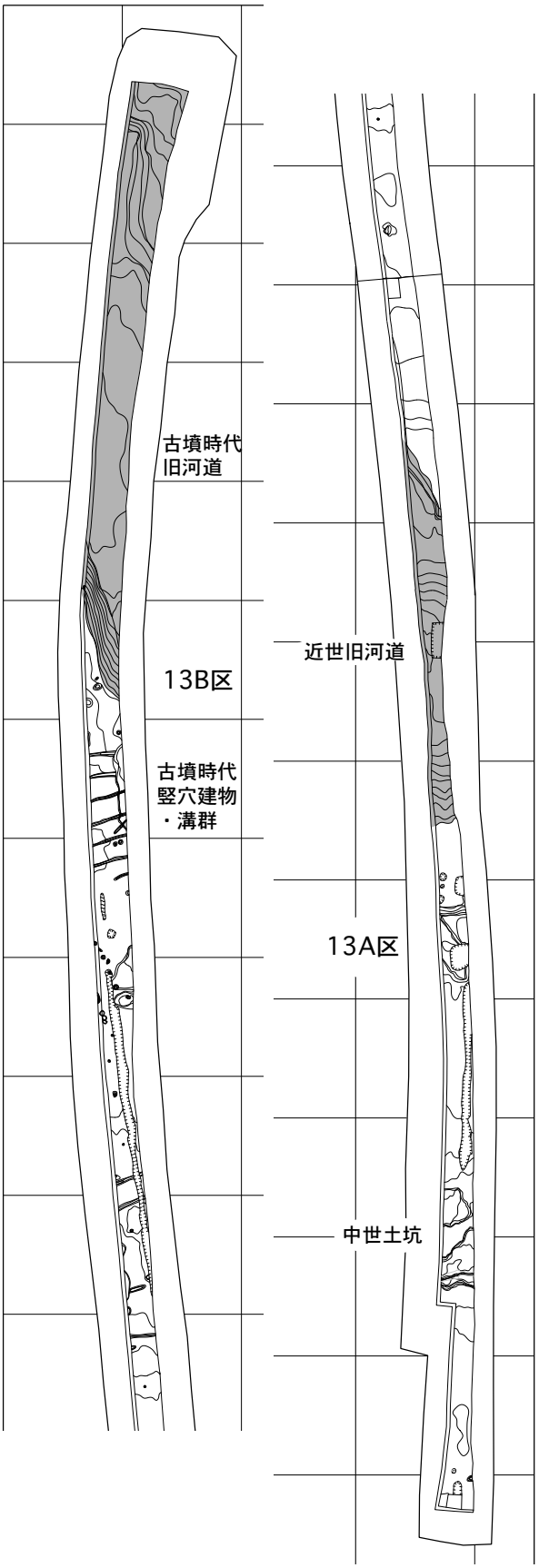
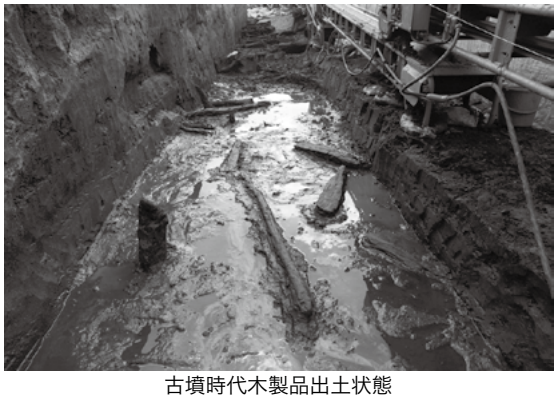


図１　遺構全体図（1:600）



A 区全景（北より）



古墳時代木製品出土状態



古墳時代竪穴住居・溝群



中世土坑

下懸（しもかけ）遺跡

所　在　地　安城市小川町向田
(北緯34度54分20秒 東経137度5分43秒)

調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成26年１月～平成26年３月

調 査 面 積　540㎡

担　当　者　宮腰健司



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年1月～平成26年3月にかけて実施した。調査区は鹿乗川に沿って、東西約7m、南北約77mに設定され、水路によって南北に分断される。調査区の呼称は本年度行われた床上浸水対策特別緊急事業（鹿乗川）に伴う調査と区別するため、13C区とした。

立地と環境　下懸遺跡は鹿乗川左岸の標高約7mの沖積地に立地する。発掘調査は平成12年度と21年度に行われており、弥生時代中期の河道や土器棺、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落や、古墳時代～中世の旧河道が検出され、赤彩された木製甲や習書・文書木簡などが出土している。

調査の概要　調査は古代～中世の遺物を含む暗褐色シルト層、弥生時代～古墳時代初期の遺物を含む黒褐色シルトを除去した後、明灰色シルト上面で遺構検出を行った。

調査区南半部については、古代以降の耕作の影響と考えられる地層の激しい撹拌のため、明灰色シルト面まで上層の土がブロック状に入り込んでおり、遺構の検出が困難であった。また遺物も大部分が小片となっていた。そのため撹拌土を除去した面を第2面として遺構の検出を行った。北半部では撹拌の影響は少ないが、竪穴建物など遺構の重複がみられた。

その結果、調査区北半部の水路より南では、古墳時代初期の竪穴建物８軒をはじめ北東から南西にかけて走る溝群や土坑が検出された。特に001SXは幅の広い周溝をもつ竪穴建物であることが判明した。また、当初多くの古墳時代初期の遺物が出土した大型土坑068SKは021SIに伴うと考えたが、別遺構である可能性もあり、021SIは長方形ではなく、正方形に近い形状となることも考えられる。

水路より北側で竪穴建物は検出されず、土坑や北に向かってゆるやかに下がっていく落ち込み、炭化物・焼土の広がりを検出した。

（宮腰健司）


明灰色シルト面（第１面）検出状況


第１面全景（南から）



北部落ち込みと炭化物・焼土検出状態



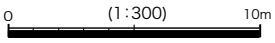
北部竪穴建物群

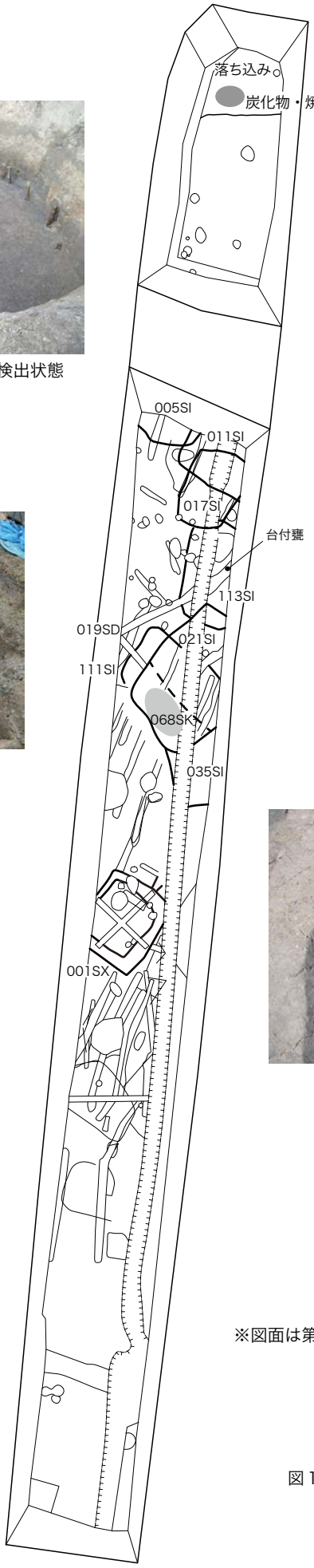


019SD 台付甕出土状態



068SK 土器出土状態



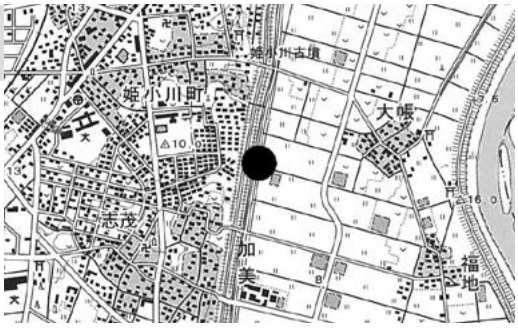


※図面は第１面と第２面を結合している。

図１　下懸遺跡 13C 区全体図

寄島（よせじま）遺跡

所　在　地　安城市小川町
（北緯34度54分34秒 東経137度5分45秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）
調 査 期 間　平成25年11月～平成26年3月
調 査 面 積　2,110 ㎡
担　当　者　酒井俊彦



調査地点（1/2.5万「西尾」）

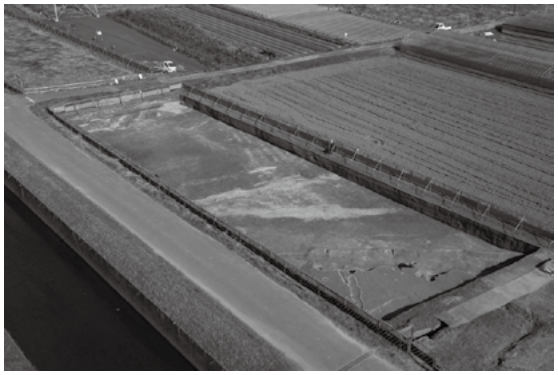
調査の経過　調査は中小河川改良事業（鹿乗川）に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成19年度から調査を開始し、今年度で4回目、総調査総面積は10710㎡である。今年度は、昨年度調査区の北側の２区画の調査を行った。

立地と環境　本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成12年より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の5遺跡が連続して所在する。現在の鹿乗川は碧海台地東辺を直線的に南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。旧鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、下懸遺跡、惣作遺跡、姫下遺跡で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧河川の自然堤防上に展開する。標高は7～7.5mである。昨年度までの調査で古墳時代の集落、墓域が検出されている。

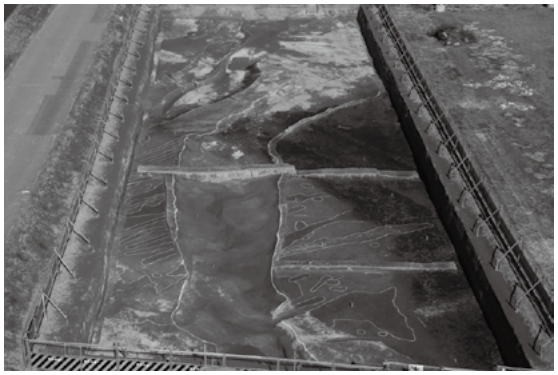
調査の概要　これまで遺跡の南から順次調査を行い、遺跡の主体となる古墳時代前期の集落が北にどのように展開するかが今回の調査の課題であった。13A区から13B区にかけて北西から南東に走る近世以前の旧河道が検出され、古墳時代の集落が展開する沖積微高地が連続しないことが確認された。13A区の南端が河道の南岸に相当し、13B区の南部で北岸が検出され、河道の幅は約60mを測る。また、13B区南東部に北東方向から南に走る古墳時代前期以前の旧河道の一部が検出された。13B区が西岸に当たり、東岸は調査区外であるため川幅は不明である。また、13B区の北西部は河川性の堆積物が基盤面になるが、堆積時期や流れる方向は確定出来ない。上面の遺構として13A区では微高地端部に河道に平行する中世溝1条が検出された。13B区では古墳時代前期の河道に沿う微高地端部に最大幅約7mの溝と微高地上で南北に走る溝2条を検出した。下面では古墳時代前期の遺構と遺物包含層が検出された。主な遺構として13A区で竪穴建物1棟と溝が確認された。13B区では旧河道の包含層が確認され、古墳時代前期の土師器と木製品・自然木が少量出土した。また、旧河道斜面上部から微高地上で土坑、溝群と井戸1基が検出された。

ま　と　め　今年度の調査で、本遺跡の北限が確認された。しかし、古墳時代前期の遺構群の展開としては、旧河道がこの時期以降に微高地を削って流れた可能性がある。本来、微高地が存在して、この時期の集落が連続して北に広がっていたことが推測される。今後は旧河道の変遷を地質調査の成果から類推し、この時期の集落の展開を検討する必要がある。

（酒井俊彦）



13A区全景（南西より）



13B区全景（南より）



13B区南半（西より）



13A区中世溝（南東より）

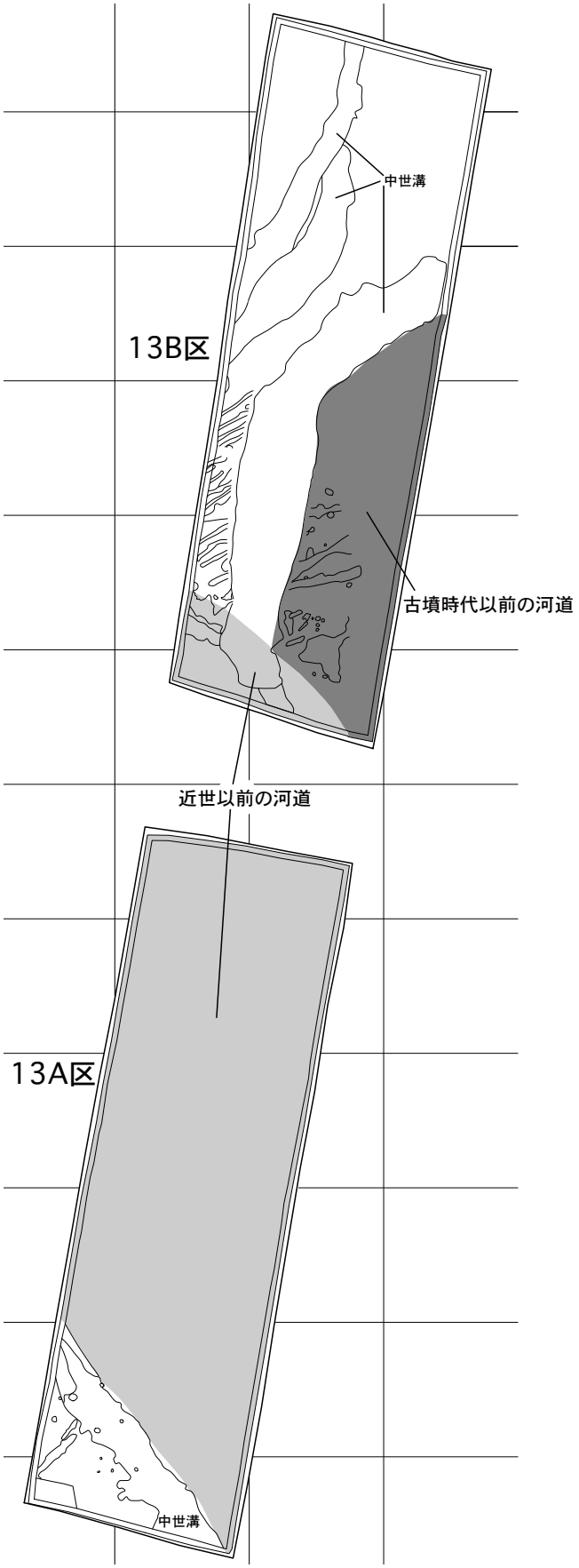


図1　遺構全体図（1:500）

宮下（みやした）遺跡

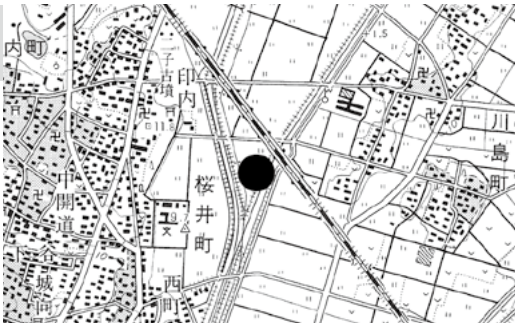
所　在　地　安城市桜井町小社
（北緯34度55分30秒 東経137度6分1秒）

調 査 理 由　中小河川改良工事（鹿乗川）

調 査 期 間　平成25年12月～平成26年１月

調 査 面 積　200㎡

担　当　者　宮腰健司



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会の委託を受けて平成25年12月～平成26年１月にかけて実施した。当該遺跡は、平成23年９月に本センターによって80㎡の面積が調査されており、この平成23年度調査区の東側を中心に、南北に隣接して今回の調査区が設けられた。また西約300mでは安城市教育委員会による調査が行われている。

立地と環境　遺跡は鹿乗川と西鹿乗川が合流する地点の、標高約８mの沖積地上に立地する。周辺には碧海台地縁辺に沿って古井遺跡群や桜林遺跡・中狭間遺跡・亀塚遺跡が並び、二子古墳や比蘇山古墳などの古墳が造られている。

調査の概要　調査は平成23年度調査区の東側にあたる地区を13A区、北・南側の地区をそれぞれ13B区・13C区として分割して行った。既調査の成果を基に、重機によって遺物が含まれる暗黄色シルト質粘土及び黒褐色粘土質シルト上面まで掘削したところ、南半部のみ包含層が広がることが確認できた。その後厚さ3～5cmの包含層を除去し、黄褐色粘土層上面で遺構検出を行った。また遺構の重複がみられる部分があったため、２面に分けて測図した。さらに東半部については、鹿乗川や堤防・水田造成による撹乱を受けており、包含層・遺構が遺存していないことが判明した。

13A区では、北側で検出された001・002・010SDについては、遺物は出土していないが、近世以降の耕作に伴う溝と思われる。中央やや南で併行して走る溝007・011・013・016SDは、下位の020SDの埋没途中の窪地に掘削されており、007・013SDでは須恵器片が出土している。020SDでは松河戸式期の土器がややまとまって出土している。

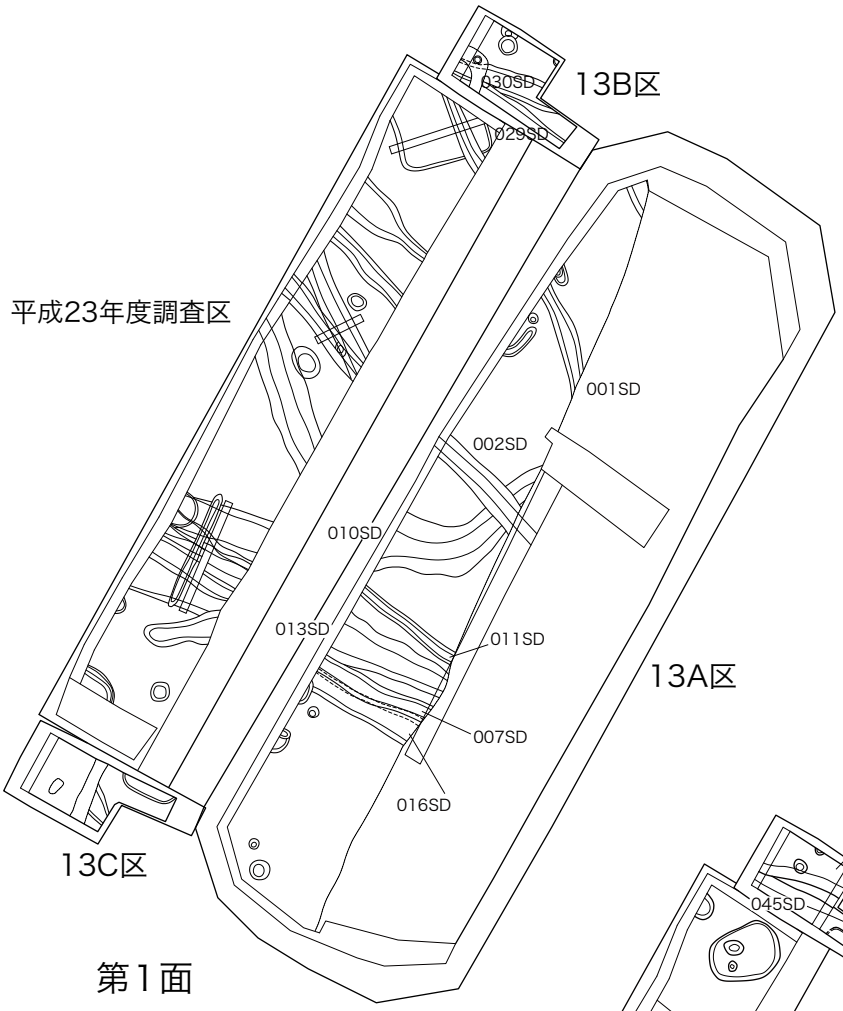
13B区では北西―南東方向に走る２条の溝029SDと030SDを検出した。さらに029SDの下位に重なるように045SDがあり小型壺が出土した。またその北側には溝または竪穴建物と思われる落ち込み044SXがある。13C区では土坑が検出されている。　（宮腰健司）



第２面全景　（南から）



045SD小型壺出土状態





第1面(南から)



020SD土器出土状態

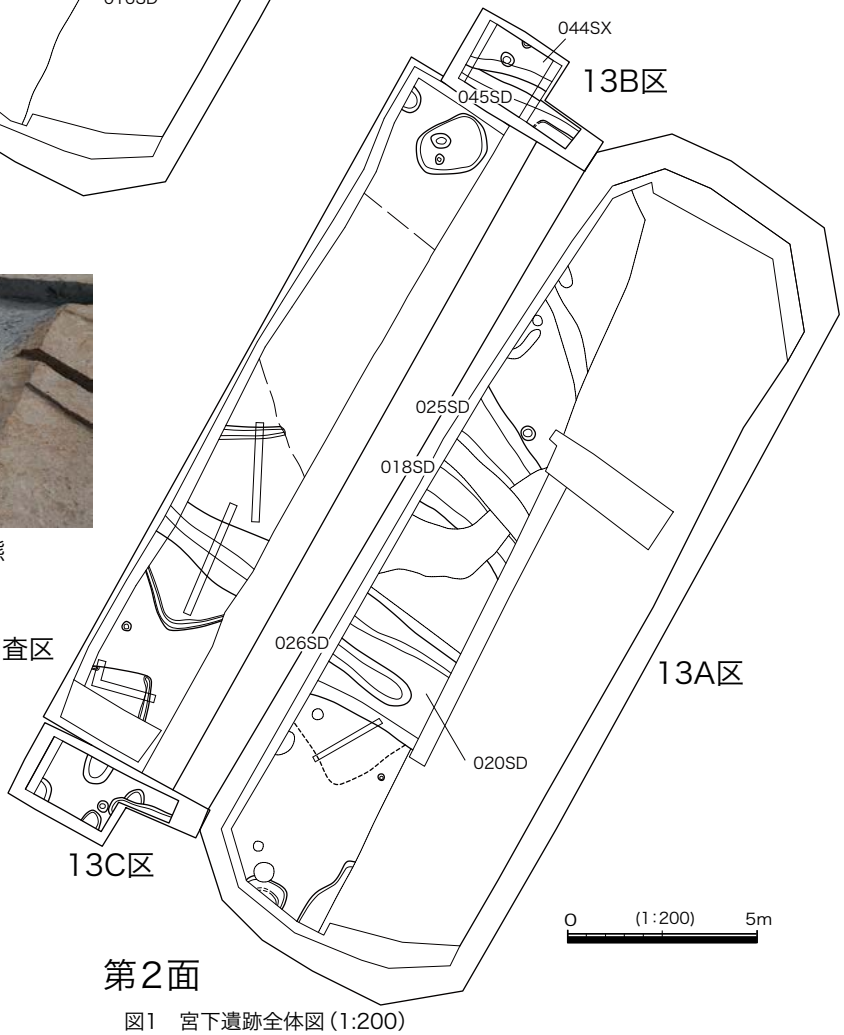


図1　宮下遺跡全体図(1:200)

八畝畑（やせばた）遺跡

所　在　地　岡崎市正名町吹野、八畝畑
（北緯34度53分28秒 東経137度7分51秒）

調 査 理 由　道路改良工事（交付金）（主）岡崎碧南線

調 査 期 間　平成23年５月～10月

調 査 面 積　3,500㎡

担　当　者　松田 訓



調査地点（1/2.5万「西尾・幸田」）

調査の経過　調査は、愛知県建設部による県道岡崎碧南線改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成25年５月から10月にかけて実施した。調査区は二分割し、13Ａ区・Ｂ区として実施した。調査面積は、3,500㎡である。

立地と環境　遺跡は岡崎市南西部に所在し、矢作川及びその支流によって形成された氾濫原の沖積地に立地する。調査地点の南側約1.5kmの位置には、古墳時代後期から終末期の円墳を主体とした羽角山古墳群が丘陵上に展開する。

調査の概要　今回の調査では、第１面において古代の竪穴建物、掘立柱建物、中世の井戸等が確認され、第２面においては弥生時代後期から古墳時代前期と思われる竪穴建物、土坑、遺物集積、自然流路等が確認された。

第１面では、調査地点全体で遺構、遺物が検出されており、この中で竪穴建物跡は南側にて６基の平面プランを検出した。いずれも後世の削平などにより基底部のみが残存しており、７～８世紀と思われる須恵器等がわずかに含まれていて、柱穴は明確ではなかった。北側にカマドと思われる焼土、袖の基底部が確認できるものも検出されたが、いずれも残存部は浅く、壁溝のみ残存し壁は消失しているものも見られた。井戸は調査区中央から南側にて６基検出され、このうち４基は曲げ物を井戸枠として利用している状況が確認できた。時期の判定できる遺物が出土しているものは少ないが、山茶碗が出土しているものが含まれた。これらの状況から、古代、中世にはこの地点にて集落が営まれていたことが想定される。またこの他にも、同じ面にて規則的な配列、方向が観察できる小穴のまとまりが見られ、掘立柱建物跡、柵列が想定された。

第２面では、調査地点の北側にて自然流路が蛇行している状況が確認でき、この河川に向かう落ち際では、古墳時代前期の土器が集中して出土する地点が確認された。この地点の土層は、北側に向かって低くなる斜面に細かく重なる状況が観察でき、洪水性の堆積が繰り返されたことが考えられる。遺物の周囲では、掘削された痕跡が確認できないことから、自然流路に向かって地形が落ち始める地点を選んで土器が廃棄されたものと考えられる。この遺物集中部では、遺存度の良好な壺、甕、高杯などが多く、短期間に集中して一定の場所に廃棄された要因が注目される。

ま　と　め　八畝畑遺跡に近接する周辺地域では、弥生時代から古墳時代、古代などに該当する明確な集落遺跡が確認されていない。先に触れた羽角山古墳群は６世紀中葉から７世紀後葉という時期が想定された古墳群であるが、これらの造営母体となった集落、集団も現時点では未解明である。八畝畑遺跡の調査で確認された居住域は、羽角山古墳群との関連性も含めて、どのように位置づけるべきなのかが重要と思われる。そのために、今後の調査資料の増加も視野に入れながら、調査成果の評価を行うことが必要であろう。　（松田 訓）



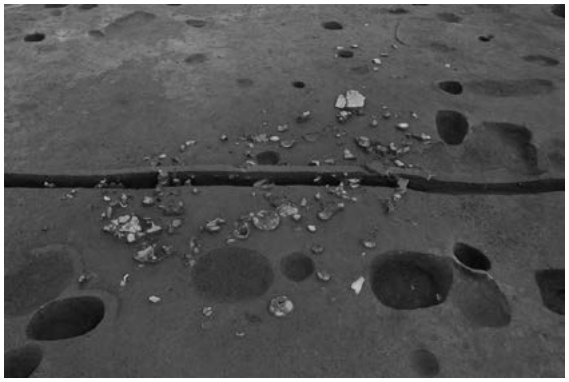
2100SE 断ち割り



291SB



2070・2080SI 完掘



3070SU 出土状況



13B 区遠景（北から）

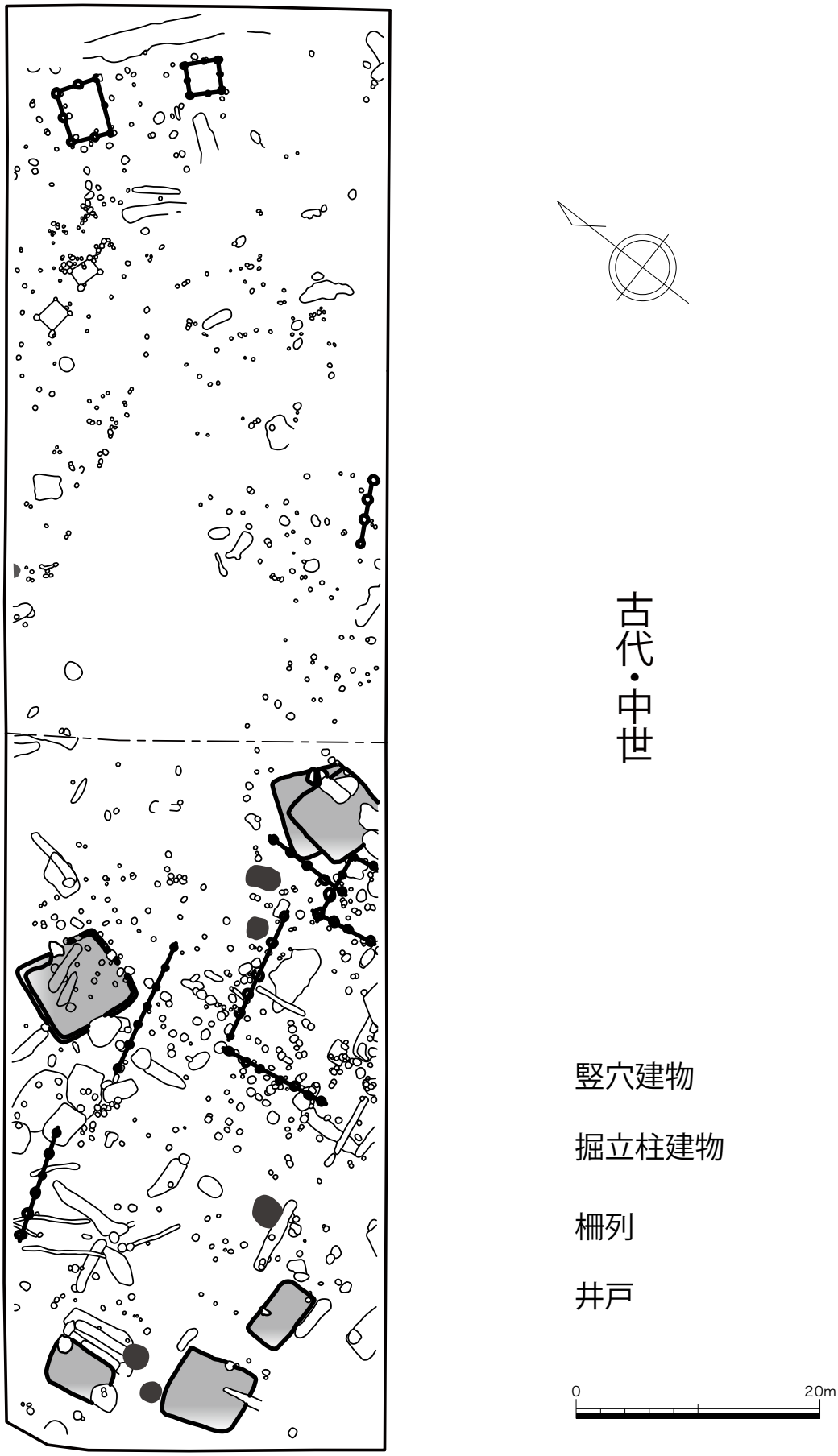


図１　調査区第１面遺構図（1:500）

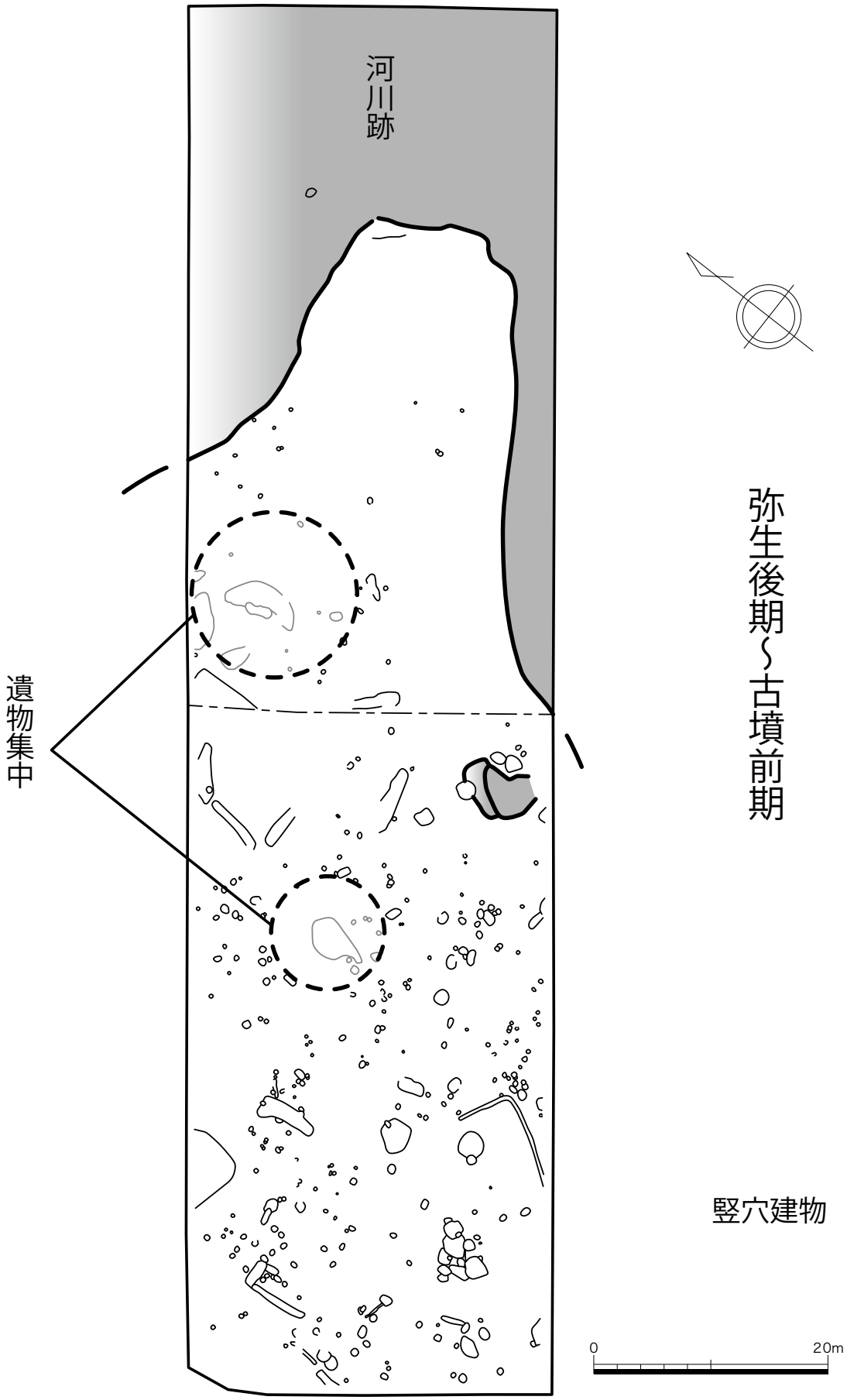


図２　調査区第２面遺構図（1:500）

孫石（まごいし）遺跡

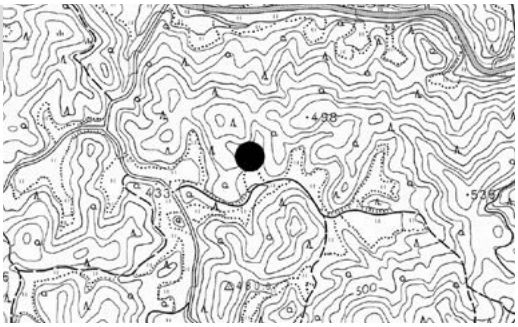
所　在　地　豊田市下山田代町孫石地内
（北緯35度1分30秒　東経137度19分27秒）

調 査 理 由　豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調 査 期 間　平成25年5月～平成25年11月

調 査 面 積　7,630㎡

担　当　者　鈴木正貴・小澤一弘



調査地点（1/2.5万「大沼」）

調査の経過　調査は愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成25年5月から11月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧水田耕作地と植林された山林であり、地形に応じて13Ａ区・13Ｂ区・13Ｃ区に分けて調査を行った。13Ｂ区の調査結果からその北側に遺構・遺物が拡がることが想定されたため、範囲確認調査（30㎡）を実施し、13Ｄ区を追加調査することとなった。本調査を実施した面積は合計で7,600㎡である。

立地と環境　孫石遺跡は郡界川の支流の一つである沖川の東岸丘陵部に所在し、沖川に合流する谷川の上流部にある緩斜面に位置する。谷を挟んで東に丸山Ａ遺跡、尾根を挟んで西に蔵平遺跡が存在しており、付近には平安時代を中心とした遺跡群が展開している。

遺跡が所在する緩斜面は北に伸びる谷部（13Ａ区）と西に伸びる谷部（13Ｂ・Ｄ区）に分かれ、この谷が合流して低湿地部（13Ｃ区）に至る。調査地点の標高は448～470mを測る。

調査の概要　調査の結果、縄文時代と平安時代および近代の遺構や遺物が確認されており、特に平安時代の遺構や遺物が多く認められた。現地表面では確認することができない小規模な谷地形もいくつか検出され、そこに黒褐色土が堆積していた。中でも、２つの谷地形の間の斜面（13Ｃ・Ｄ区）には埋没した谷地形が存在し、激しい湧水が確認された。黒褐色土は地山である花崗岩風化土の再堆積層を挟んで３層確認される場合もあるが、基本的に遺構は最上位の黒褐色土上面から構築されている。便宜上、黒褐色土の堆積が厚く灰釉陶器が多数出土する13Ｂ・Ｄ区で２面（黒褐色土上面と地山上面）、黒褐色土の堆積が薄いあるいは無い13Ａ・Ｃ区で１面（地山上面）の調査を行った。以下、時期ごとに遺構の概要を報告する。

縄 文 時 代　縄文時代の遺物としては、土器片や石器が散在してわずかに出土しているに過ぎない。遺構としては明確なものはなく、縄文時代と推定される陥穴は13Ａ区で１基（014SK）、13Ｂ区で４基（281SK・287SK・295SK・297SK）、13Ｄ区で２基（182SK・186SK）が確認された。陥穴は、緩斜面がやや急斜面に変わる変換部に構築される傾向があり、概ね隅丸方形または楕円形の平面プランを持ち、床面にピットを１～２個有する。ほとんどが黒褐色土を除去した状態で検出されたが、埋土の状態からみて本来は黒褐色土上面から設置されたものと思われる。

平 安 時 代　13Ｂ区と13Ｄ区を中心に掘立柱建物約６棟、竪穴状遺構約10基、炉跡３基の他に溝や土坑などの遺構が多数確認された。

掘立柱建物は柱間が１～２間の小規模なもので、308SBをはじめとする多くの建物は13Ｂ区の谷底緩斜面に所在する。一方、やや急な斜面には谷を挟んで対面するように１間×１間の掘立柱建物（13Ｂ区306SB・13Ｄ区194SB）が建つ。竪穴状遺構は斜面中に平坦面

を切り出す形で造られており、一辺が２～３mと小規模なものが多いが、長辺が５mを超えるもの（13Ｂ区194SIなど）もある。柱穴や壁溝等は存在せず、中央に炉跡と推定される焼土が確認される場合（13Ｄ区032SIなど）がある。谷底の緩斜面を囲むように排水用と思われる数条の溝（13Ｂ区207・211SDなど）が確認されたが、このうちのいくつかは平安時代まで遡る可能性がある。

13Ｂ区の谷頭部の緩斜面には浅くて平面規模が大きい土坑044SXが存在し、埋土から折戸53号窯式期前後に属する灰釉陶器類や土師器甕が多数出土した。また、鉄鏃１点と椀型鉄滓20点以上も出土しており、床面で炉跡１基と炭化材が散布している状態が確認された。13Ｂ区の谷開口部付近の平坦面では、炉跡が２基（178SL・179SL）確認され、焼土直上で椀型鉄滓が出土したことから、鍛冶炉であった可能性が考えられる。

掘立柱建物と竪穴状遺構はともに規模が小さく居住には適さないものと思われることから、作業場のような機能を果たしていたと推定される。鍛冶炉と思われる遺構の存在は、作業の内容を考える上で重要な資料となるだろう。鉄滓などの散漫な出土状況からみて、本格的な金属製品生産の場というよりは金属製品を多用する作業場であったと想定したい。

近　　代　近代では炭焼窯や溝などが検出された。炭焼窯は外縁部に焼土が確認される浅い土坑のタイプと焚口と煙道を持つタイプが存在する。13Ａ区001SYは焚口と煙道を持ち、壁面の一部に石を貼付けたもので窯体内には天井壁が崩落していた。13Ｂ区278SYは石敷の床面を持つもので煙道部も石材で造り付けられていた。278SYに近接して13Ｂ区279SYがあり、同様の形状を呈すると思われるが、床面には石敷を持たないものである。

ま　と　め　今回の調査では、大きく３時期の遺構群が確認されたが、いずれも山の生業に関わる遺構･遺物群であり、居住域とは考えにくい状況であった。今後は近在する遺跡群と比較して、生業全体の様相を把握することにより、その中で孫石遺跡が果たした役割を明らかにしていく必要があるだろう。（鈴木正貴・小澤一弘）



孫石遺跡 調査区遠景　（南東から）



13B区207SD・211SD（南から）



13D区遺物出土状態（南から）



13C区谷頭部遺物出土状態（南から）

図１　第２面遺構全体図（1:800）

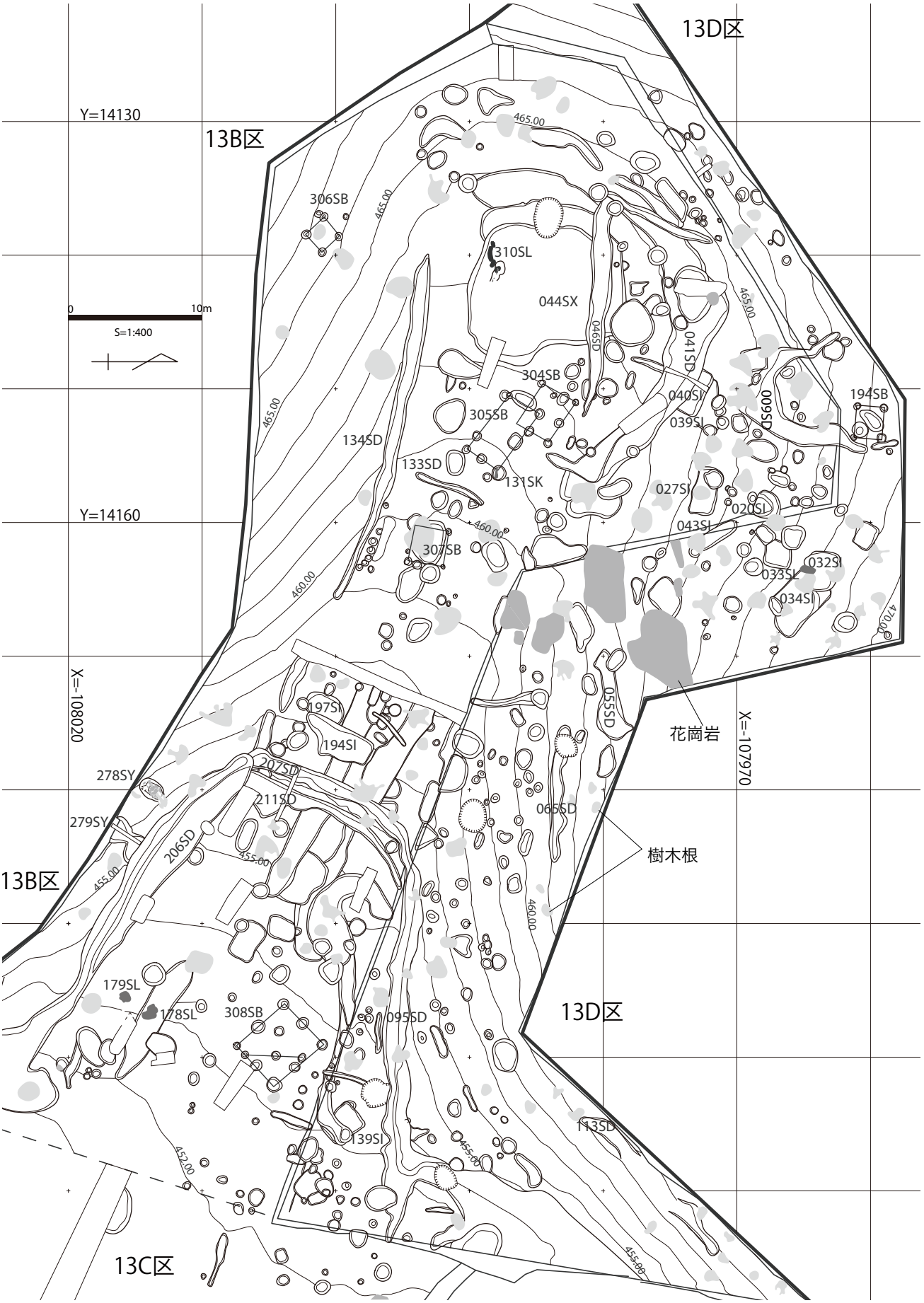
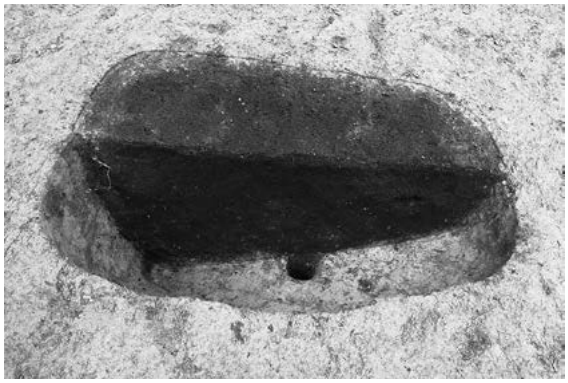


図２　13B 区・13D 区第１面主要遺構配置図（1:400）



13B区281SK土層断面（南から）



13D区斜面と谷頭（南東から）



13A区014SK（東から）



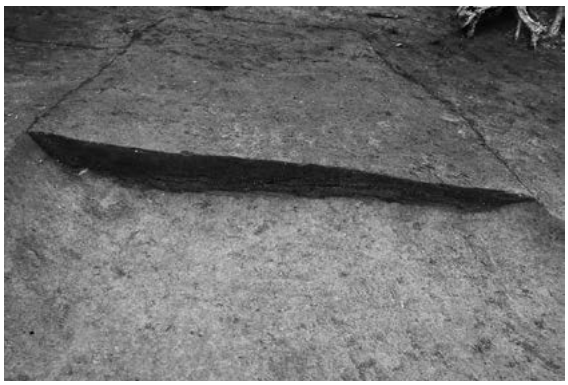
13C区谷地形（北西から）



13B区308SB（南西から）



13B区178SL・179SL土層断面（南西から）



13B区194SI土層断面（南から）



13D区032SI土層断面（北から）



13Ｂ区044SX土層断面（南から）



13Ａ区北壁土層断面（南から）



13Ｂ区278SY窯体内（北西から）

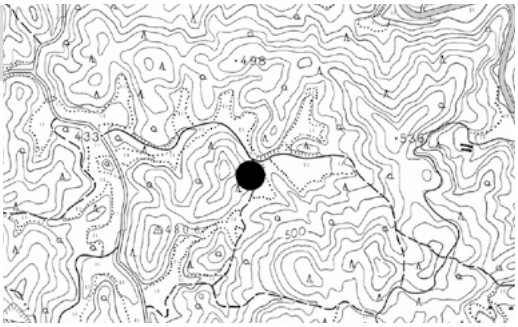


13Ａ区001SY窯体内（南東から）



13Ｂ区279SY（北から）

栗狭間（くりはざま）遺跡



調査地点（1/2.5万「大沼」）

所　在　地　豊田市下山田代町栗狭間
（北緯35度1分26秒 東経137度19分32秒）

調 査 理 由　豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調 査 期 間　平成25年4月～平成25年11月

調 査 面 積　3,170㎡

担　当　者　武部真木

調査の経過　調査は、愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発用地施設造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて実施した。調査期間は平成25年4月から11月であり、本調査の13A区・13B区・13C区3調査区と範囲確認調査（70㎡）を合わせて計3,170㎡の面積について調査を行った。

立地と環境　遺跡は、豊田市下山田代地内にて郡界川に合流する沖川上流の右岸丘陵部に位置する。本年度調査地点の地形は、北向きに開口する谷部を中心とした範囲であり、昨年度調査の12B・12D区に挟まれた13A区と、12B区南側に接する13B区、さらに13A区南側崖上の13C区という位置関係にあり、隣接した範囲を調査することになった。標高では13C区が462～469m、13A・B区は約459mである。

調査の概要　13A・B区は、調査区ほぼすべてが南西部と南東部の谷を源とする自然流路と氾濫原に含まれる。東側丘陵の縁に沿って北流する13A区001NR埋土は、概ね上からA層；褐色粘

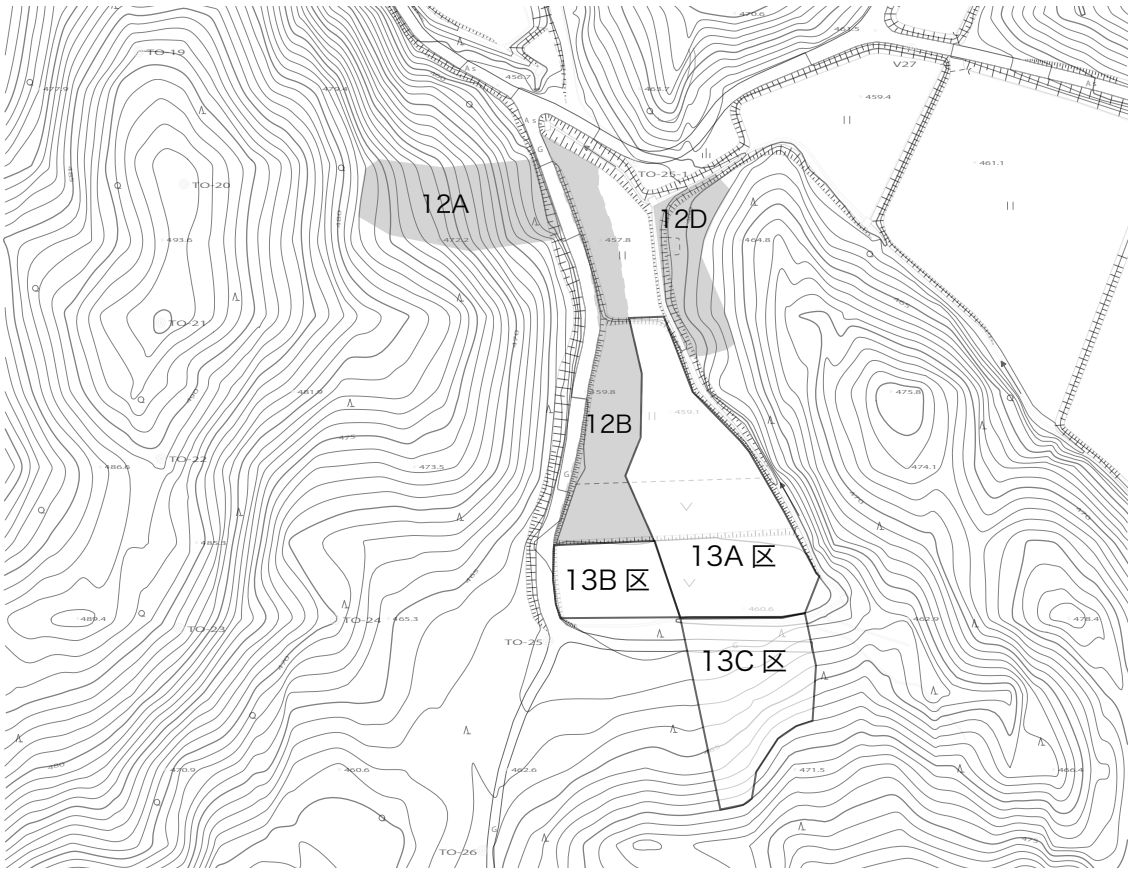


図1　調査区位置図（1:2,000）

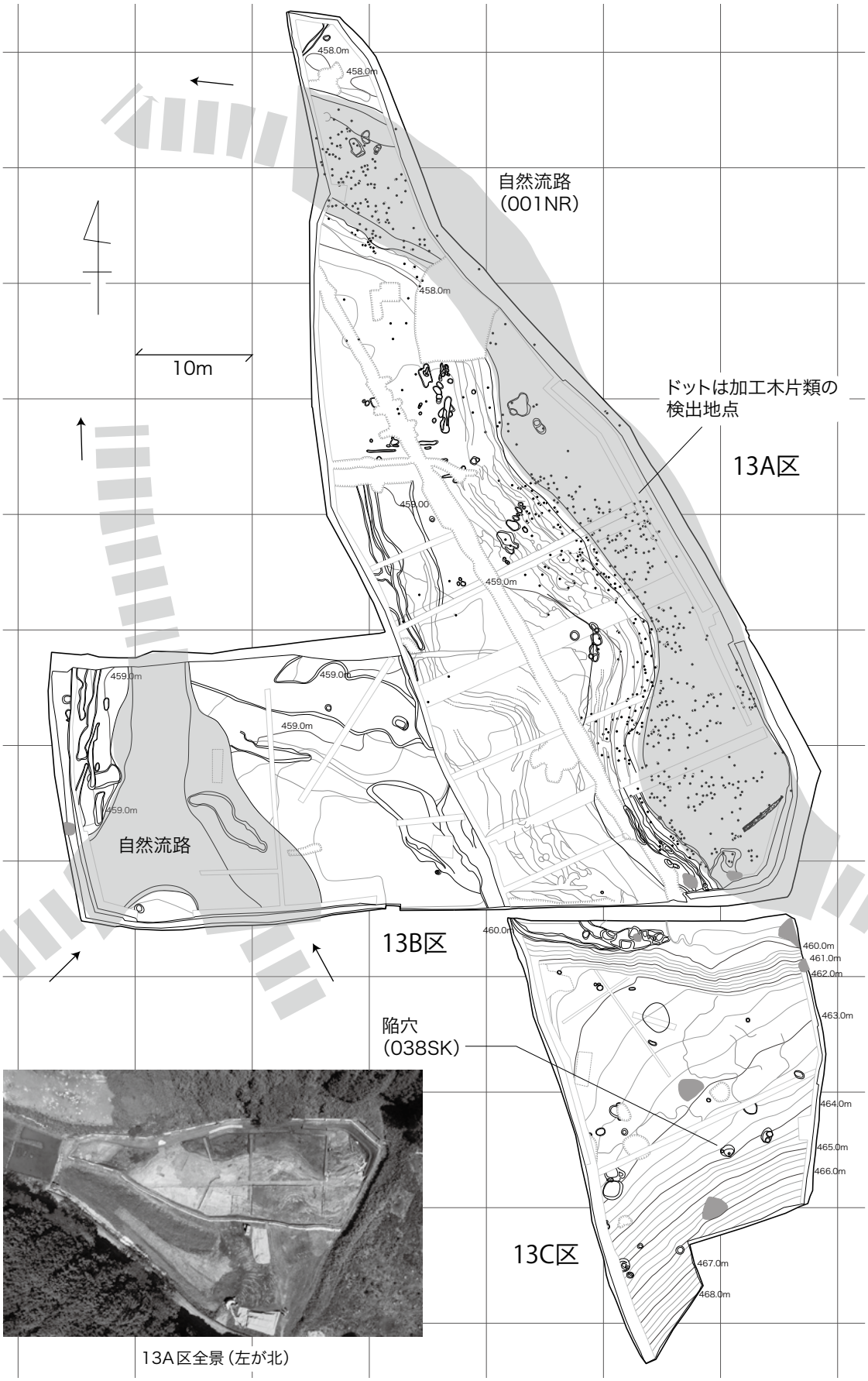
土質シルト、B層；黒色シルト～砂質シルト、C層；黒色粘土、D層；腐植物と粗粒砂の互層に大別でき、D層に含まれる灰釉陶器および植物遺体の分析（14C年代測定）により、少なくとも平安時代以降には主要な流路となり、中世の遺物を含むB層が堆積する頃に急激に埋積が進んだとみられる。注目すべき遺物として、流路の広い範囲のB層から山茶碗・小皿のほか加工痕のある木片類が大量に出土している。これらはスギ・ヒノキなど針葉樹を材に用い、形状は端部に切り欠きのある木簡状を呈するもの、一辺が10～15cm程度で中央付近に一つの穿孔をもつ長方形の板片、あるいは長さ90cm前後の棒状のものなど一定の規格の存在が認められるものが含まれる。これら木片の用途は不明であるが、製材等の加工作業が行われていたことが明らかとなり、隣接する谷地形を中心に範囲確認調査を行った。その結果、作業場所の特定には至らなかったが、トレンチの一つで加工木片を採取したことにより、さらに上流域で活動が行われていたことが判明した。

13C区の地形は丘陵端部付近の緩斜面であり、調査区北端は001NRなど河道や人為的に削られた崖面をなしている。基本層序は、上から表土（腐植土）、しまりの弱い黄灰色シルト層、黒色土層の順に堆積がみられ、風化花崗岩の基盤層に達する。13A区南東端で縄文晩期（樫王式）の土器がまとまって出土したことから崖上に活動域が予想されたが、明確な遺構は確認されず、黒色土層直上で土器の分布範囲を検出した。また基盤層に近いところで検出した黒色土を埋土とする土坑（038SK,068SK）は、底面に直径10cm前後のピット1基をもつ楕円形土坑であり陥穴と考えられる。

ま と め　今回の調査では明確な遺構がほとんど認められなかったものの、自然流路から旧石器、縄文時代草創期・早期・前期・晩期、古代（9世紀後半）、中世、近世の遺物が出土した。集落遺跡と比較して遺構・遺物ともに希薄ではあるが、こうした成果は山間地の生業の実態を伝える資料として、評価の方法から再検討される必要があろう。（武部真木）



遺跡遠景（北から,写真中央奥から左手は鶴ヶ池遺跡）



13A区全景（左が北）

図2　栗狭間遺跡13A・B・C区主要遺構配置図（1:500）



13B･C区全景（北東から）



13C区038SK（北から）



スクレーパー（白色石材, 13A区出土）



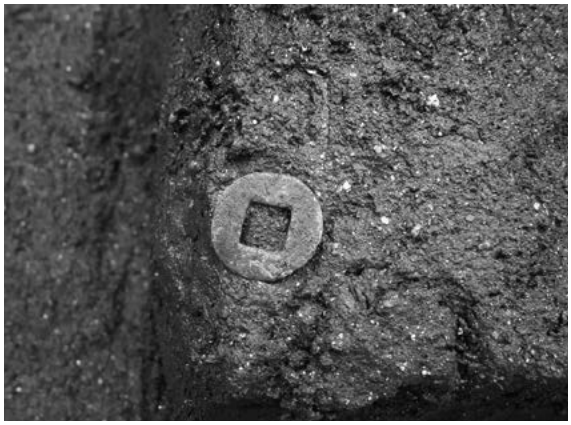
有舌尖頭器（下呂石, 13A区出土）



石製垂飾（蛇紋岩, 13A区出土）



木簡状の木製品（13A区001NR）



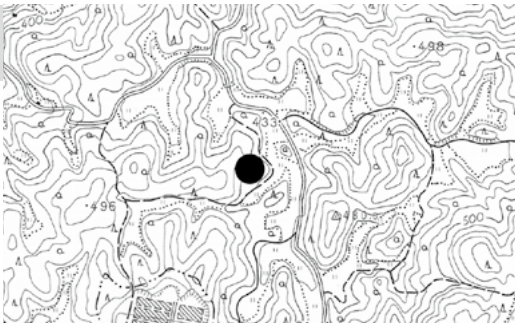
無文銭（13A区001NR）



加工木片類と中世陶器（13A区001NR）

トヨガ下（した）遺跡

所　在　地　豊田市下山田代町トヨガ下
（北緯35度15分7秒 東経137度14分46秒）
調 査 理 由　豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業
調 査 期 間　平成25年10月～平成25年12月
調 査 面 積　3,000㎡
担　当　者　鈴木正貴・武部真木・小澤一弘



調査地点（1/2.5万「東大沼」）

調査の経過　調査は、愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発用地施設造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて実施した。調査期間は平成25年10月から12月であり、13A区・13B区の２つの調査区について、計3,000㎡の面積の調査を行った。

立地と環境　遺跡は、豊田市下山田代地内にて郡界川に合流する沖川の左岸丘陵部に位置している。13A区は昨年度調査の12B区西に隣接する南向きの緩斜面であり、標高は約437～440mを測る。13B区は谷を挟んで13A区の対岸にあたる標高444～450mの丘陵上である。

調査の概要　13A区では縄文土器包含層と古代の遺物を含む旧流路（013NR）を確認した。

基本層序は、上から表土（腐植土）、しまりの弱い黄灰色砂質シルト層、黒色砂質土～シルト層の順の堆積がみられ、風化花崗岩の基盤層に達する。縄文土器は浅い谷状地形を埋めるように堆積する黒色土層の上位に含まれており、自然地形の凹みと思われる054SKと周辺の斜面に前期・後期の土器小片が散漫に分布するといった状況であった。自然流路（013NR）は、昨年度に左岸域（12B区007NR）を調査し、今回は右岸と流路の大部分を調

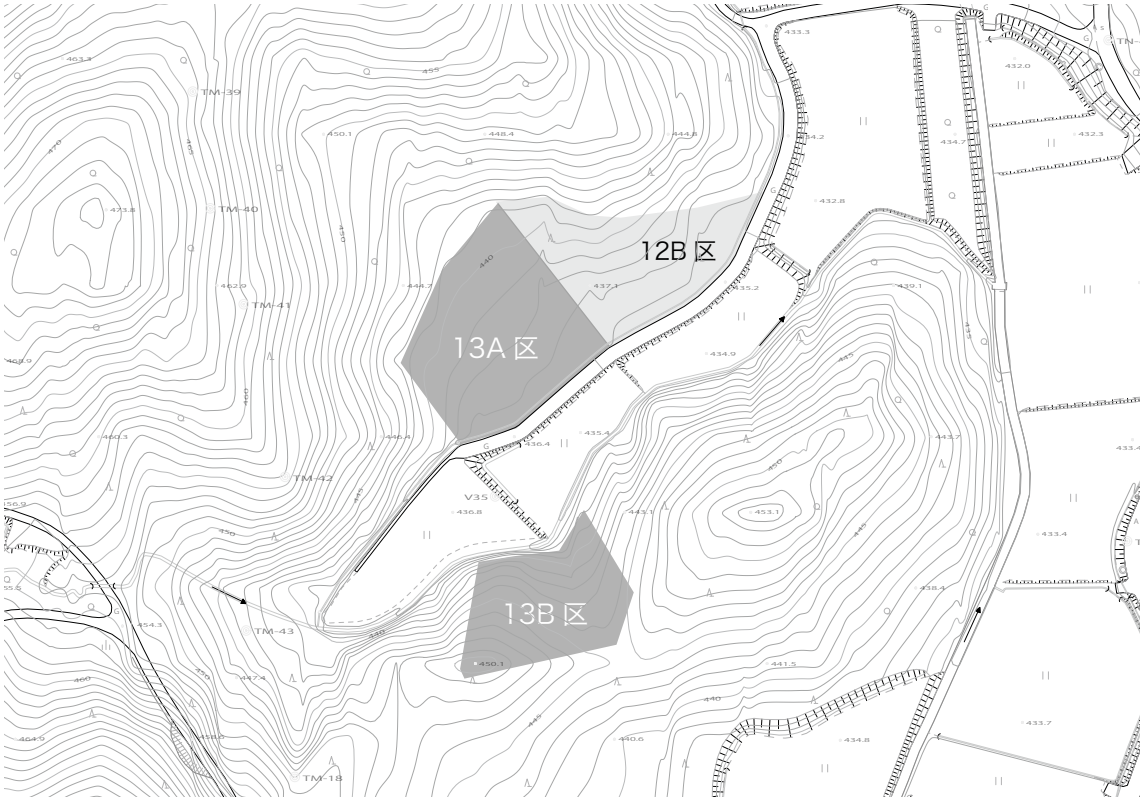


図１　トヨガ下遺跡 調査区位置図（1:2,000）

査した。出土した灰釉陶器には碗・皿、小瓶類があり、埋土の上層と下層で黒笹90号窯式から折戸53号窯式期に比定されるものがみられ、上流から流れ込み再堆積した状況がうかがわれる。灰釉陶器碗では2点の墨書が含まれるほか、土師器甕と数点の木製品（板状）が出土している。

13B区の主な遺構は、調査区西寄りの尾根上平坦面でピット状の土坑（015SK）ほか土坑数基がある。遺物をともなわず時期は不明であるが、調査区東寄りの尾根付近で検出された陥穴（030SK）は、検出面で1.2×0.9m、深さ0.83mの規模をもち、ほぼ平坦な底面の中央に直径約15cm、深さ約0.3mのピット1基が認められた。遺物では調査区西寄りの尾根上を中心に、少量ながらも縄文土器と磨石（1点）が出土している。

そのほか近代以降の炭焼窯（炭焼跡を含む）と思われる遺構は、両調査区で計11基を検出した。このうち13A区010SYは、花崗岩の岩盤の一部を削り込み、その内側に造られている。焼成室内側で長軸方向1.3m、幅0.8m、側壁の残存高1.1mの規模をもち、煙道部と側壁は石積み、底面は二重の石敷の構造となっている。出入口前方の作業スペースと思われる辺りには焼土と炭化物の混じる土坑が確認された。

ま と め

13A区付近では縄文時代前期・後期の土器が見つかり、13B区は陥穴が作られる環境にあったことが確認できた。具体的な居住域の推定に結びつく情報は少なく、下山地区の縄文時代の様相を考えるには、現状の遺跡（調査）範囲の括りよりも広い範囲を対象とした地形復元との検討から進められる必要があろう。

古代については、昨年度検出された土器と焼土を含む土坑等の遺構が今回は検出されていない。同様の緩斜面地形であったにも拘らず、谷奥側の流路の対岸域では活動の痕跡が希薄であった。ただ遺物の出土状況からは、さらに上流部にかけての範囲が中心的な活動域であったと推定される。（武部真木）



トヨガ下遺跡遠景（東から）

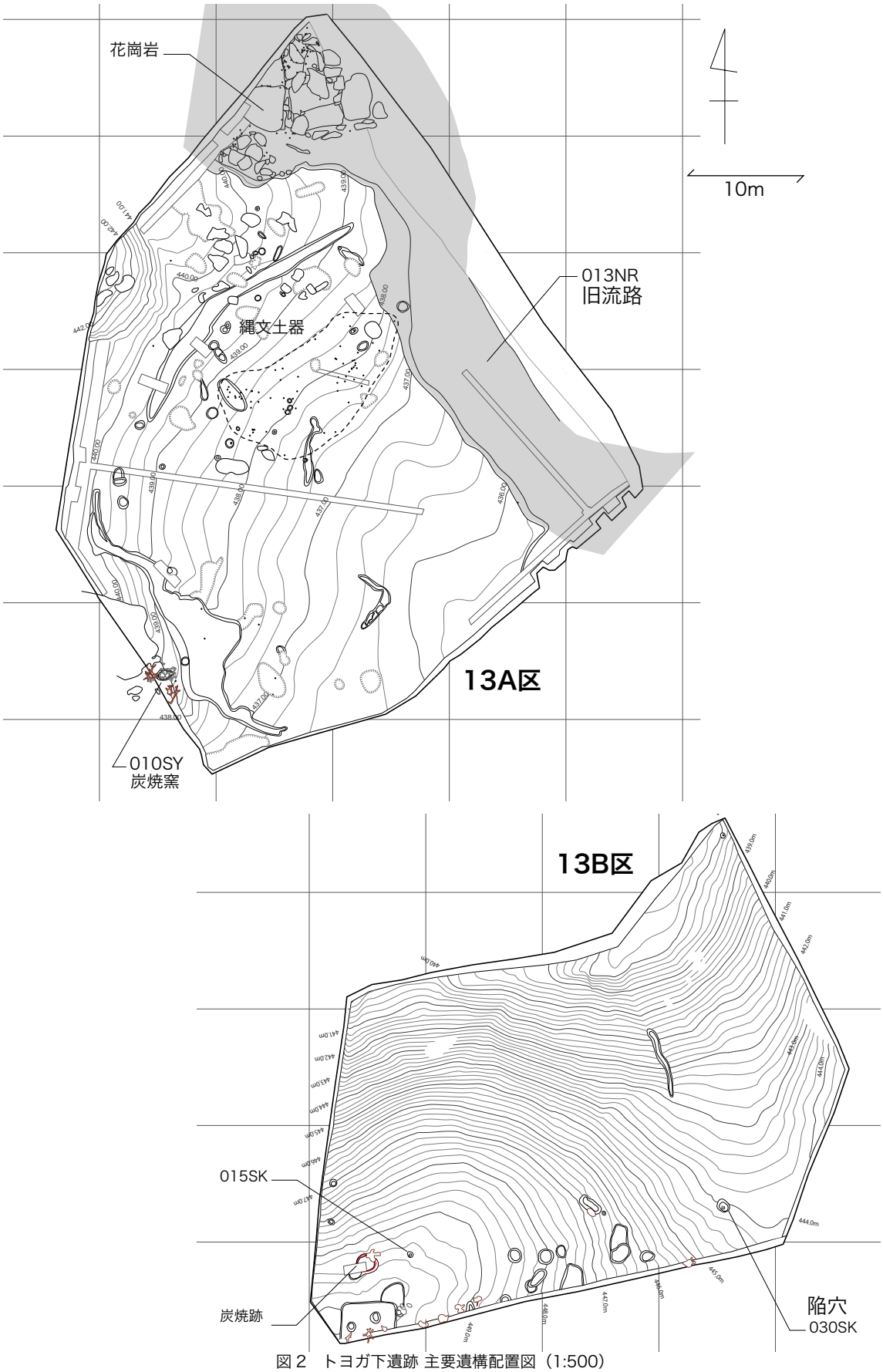


図２　トヨガ下遺跡 主要遺構配置図（1:500）



13B区全景（西から）



13B区030SK（北から）



13B区 西部完掘状況（西から）



13B区030SK断割り（北から）



13A区全景（南から）



13A区013NR遺物出土状況（南から）



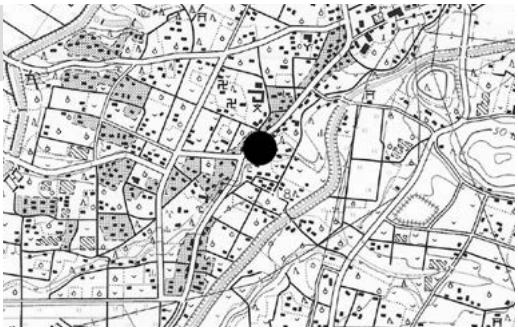
13A区縄文土器出土状況



13A区013NR出土の墨書灰釉陶器碗

野添（のぞえ）遺跡

所　在　地　豊橋市石巻本町西下地
（北緯34度47分55秒 東経137度26分15秒）
調 査 理 由　道路改良工事（主）東三河環状線
調 査 期 間　平成25年11月～平成26年3月
調 査 面 積　2,000㎡
担　当　者　松田 訓



調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　調査は、愛知県建設部による主要地方道東三河環状線改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成25年11月から平成26年３月にかけて実施した。調査区は三分割し、13Ａ区・13Ｂ区・13C区として実施した。調査面積は、2,000㎡である。

立地と環境　遺跡は豊橋市北部に所在し、豊川左岸の河岸段丘上に立地する。調査区は河岸段丘上の縁辺部に位置し、南側及び東側は神田川沿いの低地へと落ちる段丘崖となっている。調査地点の南東側約200mの位置には、神田川沿いの低地に弥生時代中～後期、中世を主体とした東下地遺跡が展開する。

調査の概要　今回の調査では、古代の土坑、竪穴建物、中世の溝等が確認された。この中で竪穴建物の可能性が考えられる遺構は、８基以上検出された。平面形態は楕円形を呈する１基を除いて隅丸方形を呈し、規模は一辺３～４mであった。主軸は方位から極端に偏向しないものが多く、３基は北側の辺がわずかに突出し、カマドの袖が基底部のみ観察されたり焼土がわずかに認められた。いずれも検出された深さは浅く、灰釉陶器椀、土器甕などがわずかに出土している。こうした竪穴建物跡の検出状況から、平安時代には段丘上の縁辺部において、集落が存在したことが想定される。

ま　と　め　調査地点の北側から中央東側にかけては、直線的な溝が検出された。断面形状は逆台形を呈しており、平面で確認できる主軸は、およそN-22°-Eを示す。検出面における規模は、長さ約45m、幅2.5～３m、深さ1.2～1.5mを測る。出土遺物はわずかであったが、基底部にあたる位置からは、無高台の山茶碗が出土している。約20m西側には、旧別所街道がこの溝と並行して通っており、溝を設ける目的、台地縁辺部での土地利用の仕方など、街道との位置関係も考慮しながらが評価することが課題である。

（松田 訓）



調査区遠景（南より）



13A区1050SI

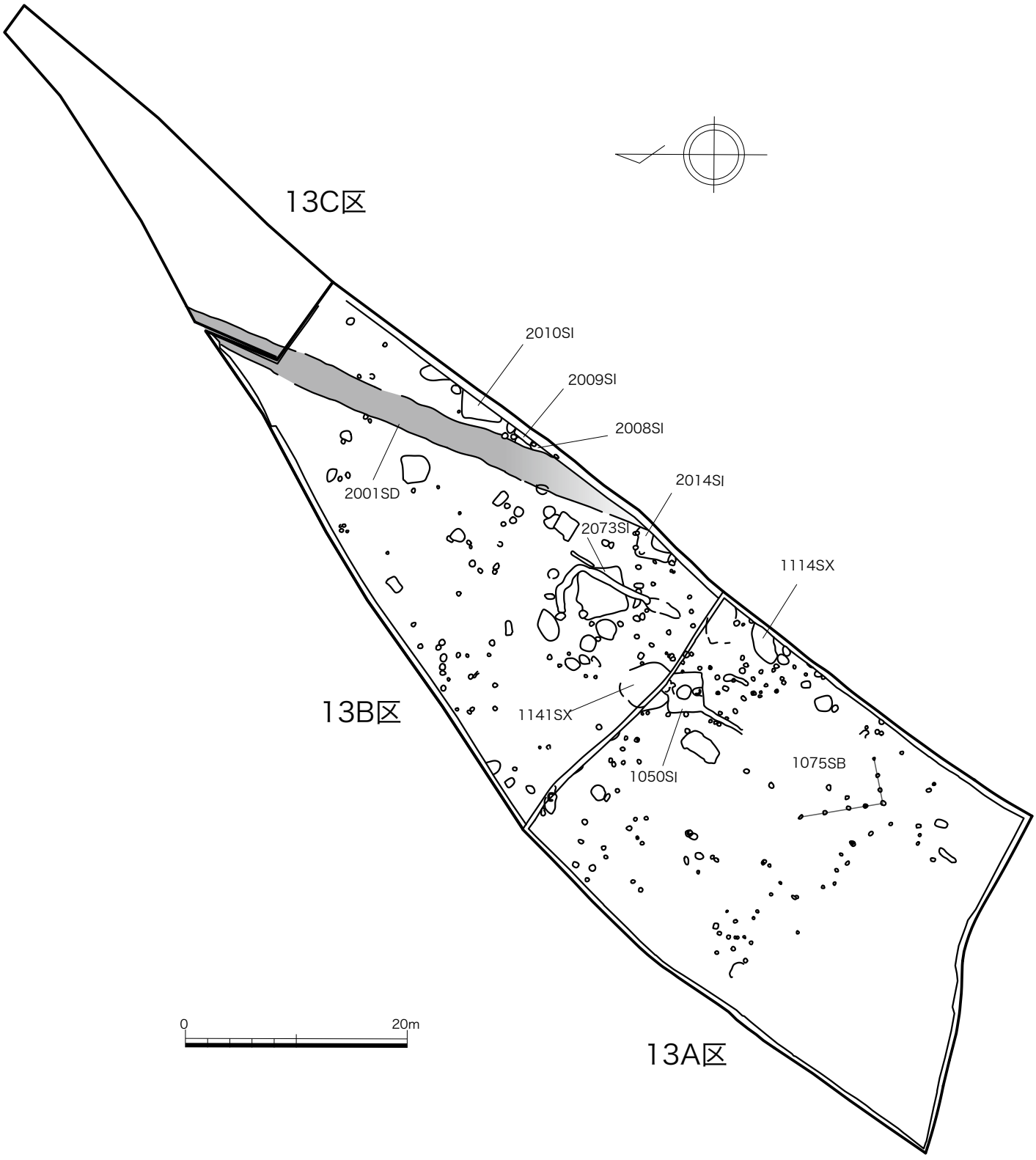
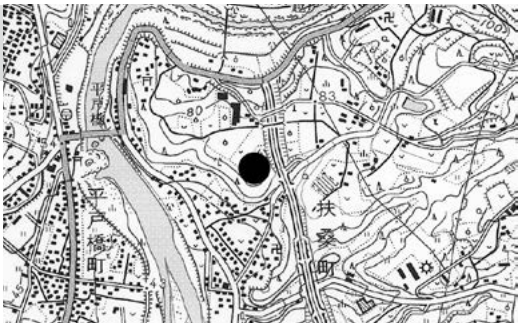


図１　野添遺跡 主要遺構配置図（1:500）

西平地（にしひらち）遺跡（範囲確認調査）

所　在　地　豊田市勘八町西平地
（北緯35度7分0秒 東経137度11分41秒）
調 査 理 由　一般国道153号豊田北バイパス
調 査 期 間　平成26年２月
調 査 面 積　200㎡
担　当　者　鈴木正貴



調査地点（1/2.5万「豊田北西」）

調査の経過　調査は国土交通省による一般国道153号豊田北バイパス建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年2月に実施した。調査対象地は丘陵頂部にあり、現況は耕作地と竹林である。県教育委員会の有無確認調査の結果を受け、1m×2mから1.5m×40mまでの規模のテストトレンチを合計25ヶ所設定した。

立地と環境　西平地遺跡は矢作川左岸の河岸段丘面に所在し、標高は75m～80mを測る。有無確認調査で中世の中国産青磁片が発見された遺跡であり、付近には馬場瀬古墳群が所在する。

調査の概要　調査は、中世を中心とした遺跡範囲の広がりと、馬場瀬古墳群に関連した遺構の有無、および旧石器時代の遺跡の有無などを視野に入れて実施した。調査の結果、全てのテストトレンチで層厚10～30cmの表土を除去した直下から、黄褐色シルトや中粒砂などで構成される地山が露出した。この地山を掘り込む土坑などがいくつか検出されたが、いずれも


TT-02 灰釉陶器出土状況（北西から）


TT-05 土層断面（南東から）


TT-01 掘削前状況（東から）


TT-02 検出された遺構？（西から）

江戸時代以降に属するものと推定された。

矢作川に面する西向き斜面の上端部には長さ20mのテストトレンチを２ヶ所設定したが、古墳および関連する遺構・遺物は確認されなかった。また、調査対象地中央を東西方向に長さ20m～40mのテストトレンチを３ヶ所設定し、深さ1m以上掘削したところ、20～50cm大の円礫を多く含む堆積など地山の堆積状況が確認されたが、そこから遺構・遺物を発見するには至らなかった。

ま と め

遺物は、TT-02から灰釉陶器片が1点確認された。また、江戸時代後期から近代にかけての陶磁器片が十数点出土した。

今回の調査では、中世に関わる情報を得ることができなかったが、平安時代の遺物を発見することができた。しかし、出土遺物は極めて少なく、集落遺跡などが存在したとは言いがたい状況である。

（鈴木正貴）

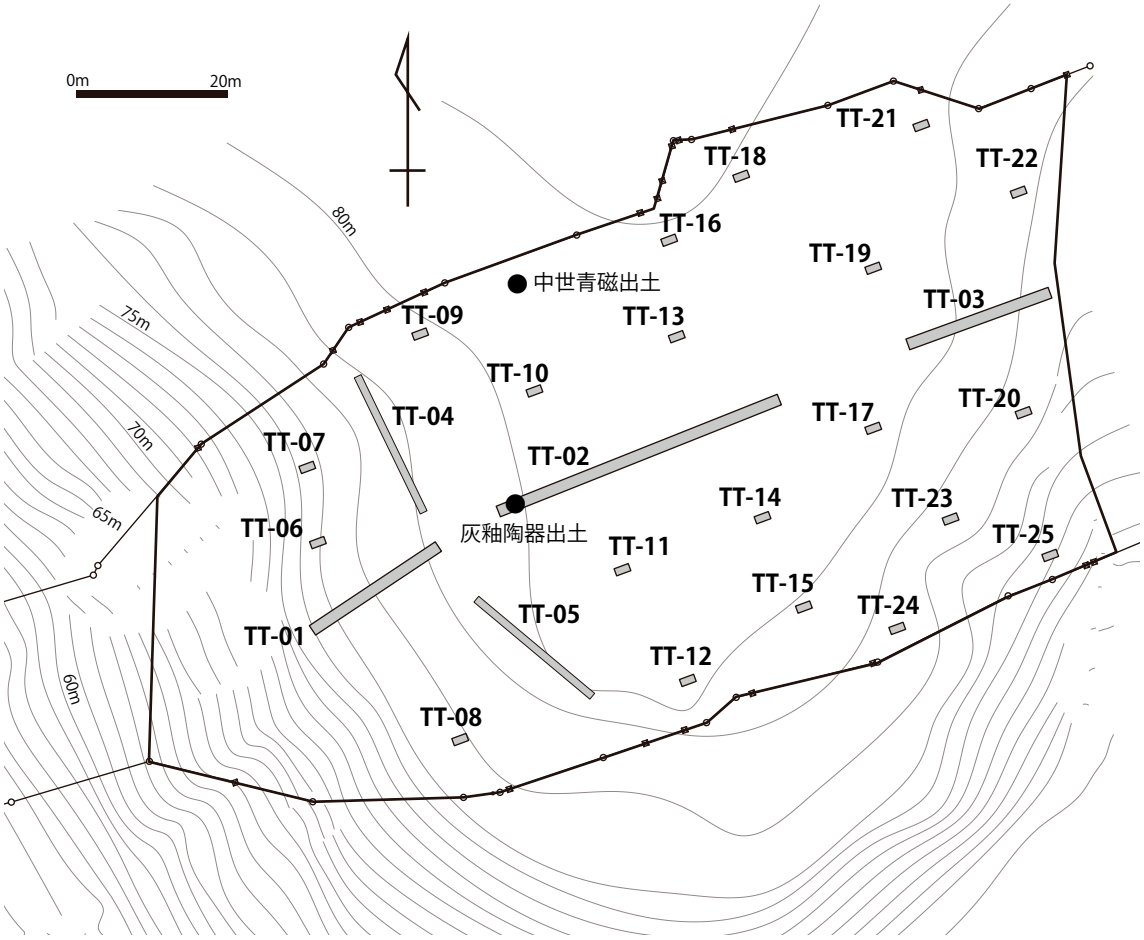


図１　西平地遺跡トレンチ配置図（1:1,000）

滝瀬遺跡始め4遺跡（範囲確認調査）
大名倉（おおなぐら）遺跡/西地（にしち）・東地（ひがしち）遺跡/万瀬（まんせ）遺跡/滝瀬（たきせ）遺跡

所　在　地　北設楽郡設楽町大名倉字滝ノ上ほか、同西地・東地、同町川向字マンゼ、同町八橋字タキセ
（北緯35度6分33秒 東経137度32分44秒、北緯35度6分40秒 東経137度32分40秒、
北緯35度6分49秒 東経137度33分58秒、北緯35度7分10秒 東経137度34分55秒）

調査理由　設楽ダム工事

調査期間　平成25年5月～25年6月

調査面積　400㎡

担　当　者　宮腰健司・永井邦仁

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。今年度は4遺跡が範囲確認調査対象となった。調査方法は、各遺跡内の事業用地内にかかる部分について、1m×2mから最大で3m×５m四方のテスト・トレンチ（T.T.）を設定して基盤層まで掘削し、遺構・遺物の有無を確認するとともに、堆積層の状況を観察するものである。トレンチ数は、大名倉遺跡で18か所（39㎡）、西地・東地遺跡で28か所（70㎡）、万瀬遺跡で30か所（64㎡）、滝瀬遺跡で34か所（227㎡）の、総計110か所（400㎡）である。

立地と環境　大名倉遺跡と西地・東地遺跡は豊川上流のそれぞれ右岸と左岸に位置する。大名倉遺跡（標高419～458m）は、河岸段丘から斜面にかけて立地し、概ね前者が耕作地で後者が現在の集落となっている。西地・東地遺跡が立地する斜面は大半が扇状地となっており、標高450～465mである。万瀬遺跡は豊川支流境川の右岸河岸段丘から斜面に立地し、現在集落は国道256号と設楽大橋北で交差する県道427号（標高419m）の周囲に展開する。滝瀬遺跡は、万瀬遺跡からさらに上流の境川右岸河岸段丘（標高420～422m）から斜面（標高433～438m）に立地するが、河岸段丘の一部が近年に盛土造成されておりその微地形や範囲についてはわからなくなっている。

調査の概要
大名倉遺跡　大名倉遺跡の南北に細長い調査対象地は比較的高位にあり、中央部の民家を挟んで北区域(T.T.-1～9)と南区域（T.T.10～18）に分かれる。北区域北端では土石流堆積が確認され遺構・遺物ともに希薄である。一方南区域ではT.T.11・12で土石流堆積がみられ、付近の方によると近代にも土石流が発生しているという。それ以外ではシルト質の地山が検出され、上位の平場（T.T.17・18）では土坑が検出され近世の陶磁器が出土する。近隣の墓地にある墓石には18世紀後半以降の年号が記されており、その頃から屋敷地化が始まったようである。縄文時代の遺物が多数出土する河岸段丘面とは対照的といえよう。

西地・東地遺跡　西地・東地遺跡では、県道33号西側（T.T.1～3）は崖地形となり、T.T.4～10にかけての尾根状の地形では遺物を包含する黒色土の水平堆積を認められる。当該層はさらに細分されるとみられるが、縄文時代の石鏃（T.T.-6）や宋銭（T.T.-9）が出土し注目される。またT.T.-9からは古瀬戸の平碗なども出土し、付近の昨年度範囲確認調査トレンチで灰釉陶器から山茶碗の出土があることから、縄文時代とともに平安時代から江戸時代の遺構・遺物の分布が想定される。しかしその東方では土石流に由来する厚い傾斜堆積が2m以上に及ぶトレンチがいくつもある。これらは若干の遺物があるものの遺構が検出されていない。わすかに町道脇に平場があって、T.T.-12・13・21で粘土質の安定的な地山が認められるが、ピットと近世の遺物が出土しているのみである。

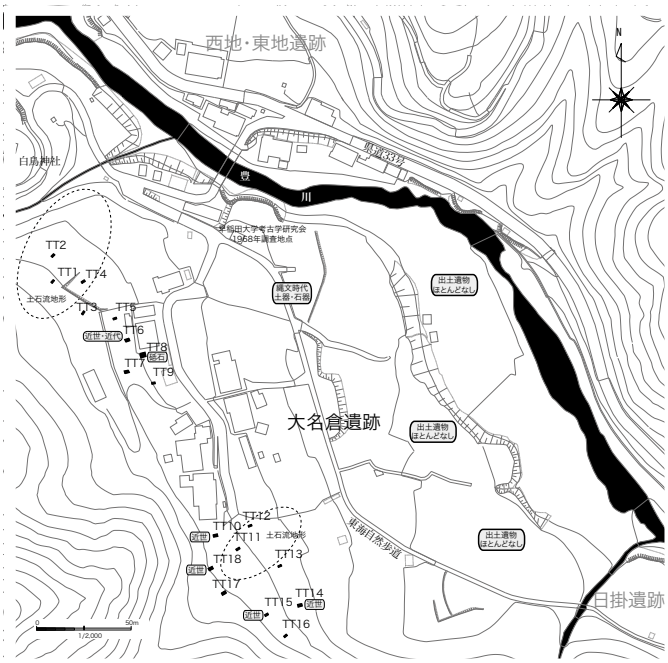
万瀬遺跡　万瀬遺跡では、下位の杉林中のT.T.-1～4は粘土質地山面に遺構はなく、近世後半以降の遺物が若干出土するのみである。一方県道33号直下の平場（T.T.-8・9）の粘土質地山面では、土坑などが検出され縄文土器（無文）が出土した。当該トレンチ北東側では平成21年度の調査で谷地形になることが想定されるので、これに沿う立地の縄文時代集落が想定できよう。そして県道から上位の斜面地は大きく崩れた形跡がなく、その南東下位の平場（T.T.-16～18・24）では遺構の他に近世陶磁器が出土している。地元の方によると、当該平場には「舞台屋敷」と呼ばれる大きな建物があったと言い伝えられており、約100年以上前には失われていたらしい。さらに東方のトレンチでは戦国時代の遺物も出土しているので、現集落に続く戦国・江戸時代の遺構・遺物分布が想定される。加えてT.T.-28・29では縄文土器が出土しており、ここも小規模な縄文時代の居住地になっていたと考えられる。

滝瀬遺跡　滝瀬遺跡は、上位斜面のT.T.1～11で安定的な粘土質地山がみられるので比較的古い地形が保持されているものと考えられる。特にT.T.-6では黒色土を埋土とする幅約1mの溝状遺構を検出し、石器剥片や土器砕片が出土した。広がりは確かめられていないが、一帯に縄文時代の遺構が展開する可能性が考えられる。これに対して下位の調査対象地では、盛土下の河岸段丘面を検証した。T.T.-12～14では氾濫原の堆積であるがT.T.-15・16で砂礫層地山の上に黒色土が認められ縄文土器や石器剥片が多数出土した。平成24年度調査対象地に隣接するT.T.-17～21は、地山面で遺構を検出し縄文土器・石器が出土したことや、T.T.-18と同22の間で地山面の高低差が1.7mもあることから、当該地点に段丘崖があり縄文時代集落の端部になるとみられる。段丘崖線は概ね直線で下流方向にのびるが、T.T.-30・31に谷地形があり、その北側T.T.-32～34で溝状遺構や縄文土器が検出されている。またT.T.-32からは平安時代の灰釉陶器も出土している。

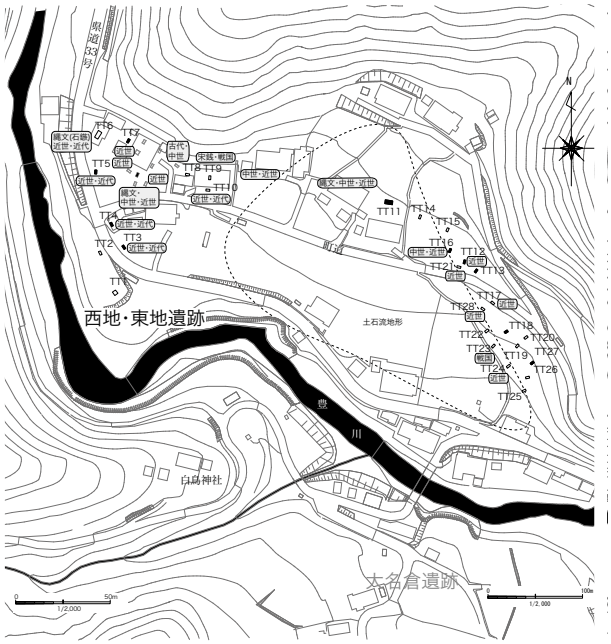
（永井邦仁）



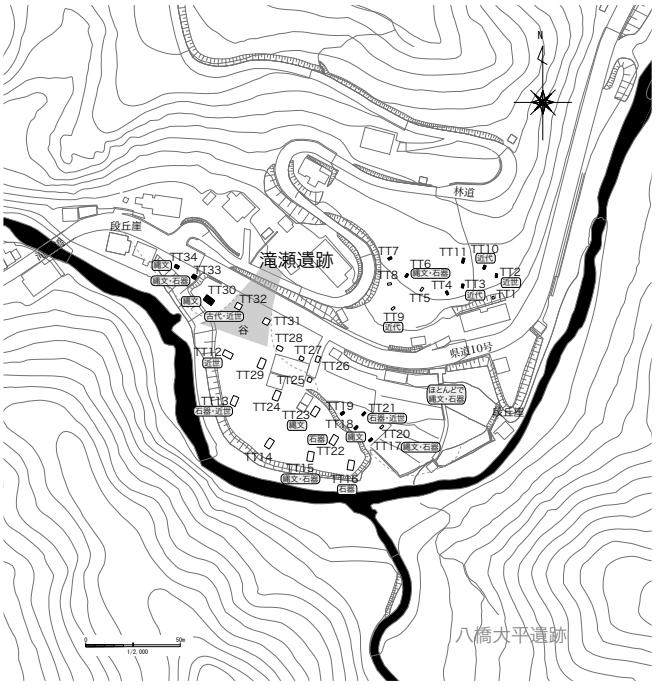
図１　遺跡の位置（1:25,000）



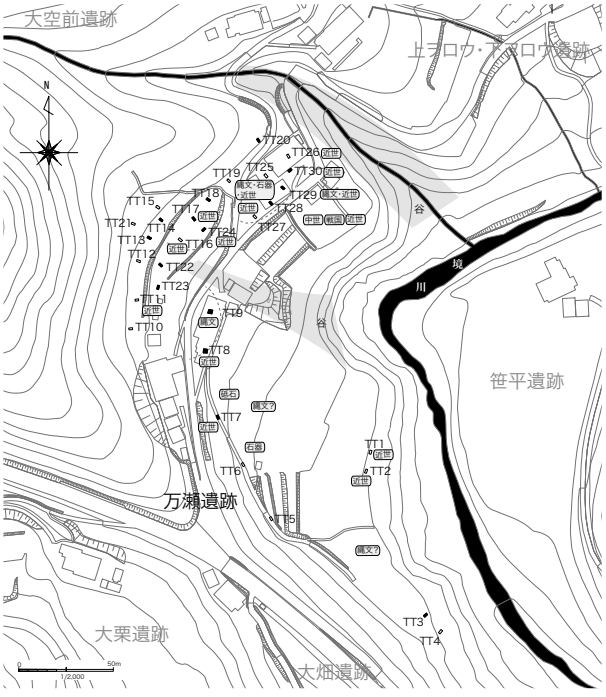
大名倉遺跡　過去の発掘調査および当センターがこれまで実施してきた範囲確認調査は、河岸段丘面を中心とする比較的低位が対象地であったが、本年度はより高位で斜面にかかる地点が対象地となった。出土遺物は前者では縄文時代の土器・石器がほとんどであったのに対し、本年度は縄文土器・石器は全くなく、近世後半を中心とする遺物の出土にとどまった。



西地・東地遺跡　遺跡の西端および東端を中心に確認調査を実施した。特に遺跡西端では石鏃や宋銭といった特徴的な遺物が出土している。一方で東端では遺物の出土が少なく、安定的な遺物包含層はあまり存在していない。特に下位になると土石流などの斜面崩落による堆積が厚い。



滝瀬遺跡　河岸段丘の崖線が途中に小谷を挟みながら直線的にのびる。この崖上に縄文時代集落が展開するとみられるが、崖下の氾濫原からも縄文土器や石器が多数出土しており注意を要する。一方、県道より上位の斜面には比較的緩いところがあり、ここにも縄文時代の遺構・遺物の分布が想定される。



万瀬遺跡　対岸段丘面の笹平遺跡は縄文時代集落とみられるが、T.T.-1～4は数m高くなり遺構・遺物がほとんどない。これに対して上位の平場に縄文土器がみられる。出土トレンチはいずれも沢地形に面しており関連があるとみられる。

図２　範囲確認調査の概要